岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第365集

台太郎遺跡第22次発掘調査報告書

（だいたろう）

盛岡東警察署警察官待機宿舎建設事業関連発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

台太郎遺跡第22次発掘調査報告書

盛岡東警察署警察官待機宿舎建設事業関連発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、旧石器時代をはじめとする数多くの貴重な遺跡や重要な文化財が残されております。先人たちが創造し、遺してきたこれら多くの文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民一人ひとりに課せられた大切な責務であります。

その一方で、社会資本の充実を目指した地域開発等も県民の切実な願いであり、「埋蔵文化財の保護・保存」と「開発」という相容れない要素を持つ事業の、調和のとれた施策が今日的課題となっております。財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとって参りました。

本書は、岩手県警察本部による盛岡東警察署警察官待機宿舎新築工事に関して、平成11年度に発掘調査を実施した台太郎遺跡第22次調査の結果についてまとめたものであります。遺跡は雫石川右岸の河岸段丘面上に立地しており、調査の結果、奈良～平安時代を中心とする集落跡であることが明らかになりました。竪穴住居跡や堀跡からは土師器をはじめとする各種の遺物が出土しており、周辺の遺跡や北西側約2㎞に位置する志波城跡と集落構造の関連性を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をより一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました岩手県警察本部や盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　千　葉　浩　一

例　　言

1．本報告書は岩手県盛岡市向中野字向中野３９－１ほかに所在する台太郎遺跡第22次発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、盛岡東警察署警察官待機宿舎建設に伴い、岩手県教育委員会文化課と岩手県警察本部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として行った緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は以下の通りである。

　　遺跡番号 …… ＬＥ１６－２２６９

　　遺跡略号 …… ＯＤＴ－９９－２２

4．調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

調査期間	平成１１年９月１日～平成１１年１１月２日
調査面積	２，５００㎡
調査担当者	菅原靖男・半澤武彦

5．室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

室内整理期間	平成１１年１１月３日～平成１２年２月２９日
整理担当者	菅原靖男・半澤武彦

6．本報告書の執筆・編集は菅原靖男が担当した。

7．遺物の分析・鑑定及び保存処理にあたっては次の機関にご協力をいただいた。（敬称略）

羽口分析鑑定	岩手県立博物館
銭貨保存処理	岩手県立博物館
陶磁器鑑定	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

8．委託業務にあたっては次の方々に依頼した。（敬称略）

基準点測量	（株）吉田測量設計
空中写真	東邦航空（株）

9．土層及び土器の色調観察には農林水産省農林水産技術会議監修の「新版標準土色帖」を参考にした。

10．遺跡の調査成果は平成１１年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表したが、本書の内容が優先するものである。

11．発掘調査においては盛岡市教育委員会をはじめ、多くの地元の方々にご協力をいただいた。

12．報告書の作成にあたり、次の方々からご指導をいただいた。（敬称省略、順不同）

　　藤澤良祐・青木　修　　（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）

　　赤沼英男・咲山まどか　（岩手県立博物館）

13．本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は岩手県立埋蔵文化センターに保管してある。

目　　次

序
例　言

[本　　文]

Ⅰ．調査に至る経過 …… 3

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 3
　1．遺跡の立地 …… 3
　2．遺跡周辺の地形と地質 …… 3
　3．遺跡の基本層序 …… 5
　4．周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ．調査の方法と室内整理 …… 11
　1．野外調査の方法 …… 11
　2．室内整理の方法 …… 12

Ⅳ．検出された遺構と遺物 …… 15
　1．概要 …… 15
　2．竪穴住居跡 …… 15
　3．土坑 …… 17
　4．堀跡 …… 21
　5．溝跡 …… 24
　6．柱穴状土坑群 …… 29
　7．遺構外遺物 …… 29

Ⅴ．まとめ …… 34

Ⅵ．分析・鑑定結果 …… 38

報告書抄録

職員一覧

[図　　版]

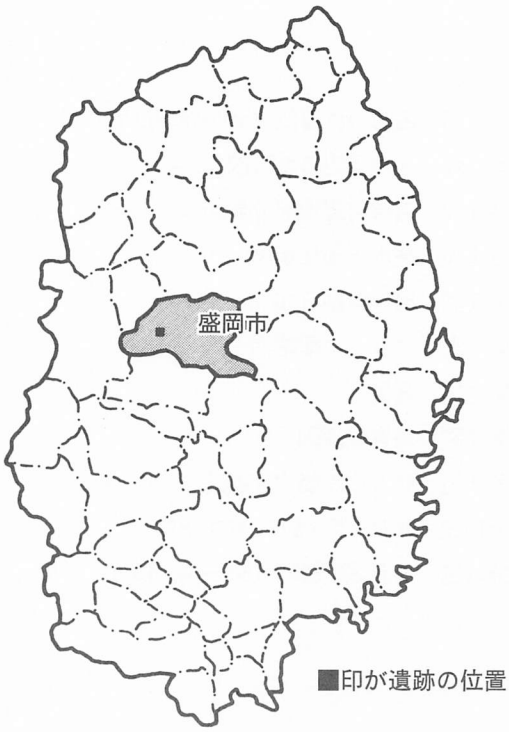
第１図　遺跡の位置及び遺跡周辺の地形図 …… 1
第２図　遺跡周辺の地形図 …… 2
第３図　遺跡周辺地形分類図 …… 4
第４図　基本土層柱状図 …… 5
第５図　周辺遺跡分布図 …… 6
第６図　グリッド配置図 …… 11
第７図　凡例 …… 13
第８図　遺構配置図 …… 14
第９図　ＲＡ 301 竪穴住居跡 …… 16
第10図　ＲＤ 825・826・827 土坑 …… 18
第11図　ＲＤ 828・829・830・831・832・833・834 土坑 …… 20
第12図　ＲＧ 273 堀跡（1） …… 22
第13図　ＲＧ 273 堀跡（2） …… 23
第14図　ＲＧ 265・267・ 274・275 溝跡 …… 25
第15図　ＲＧ 276・277・278 溝跡 …… 27
第16図　ＲＧ 279・280 溝跡 …… 28
第17図　柱穴状土坑群 …… 30
第18図　遺構内出土遺物（1） …… 31
第19図　遺構内出土遺物（2） …… 32
第20図　遺構内出土遺物（3）
　　遺構外出土遺物 …… 33

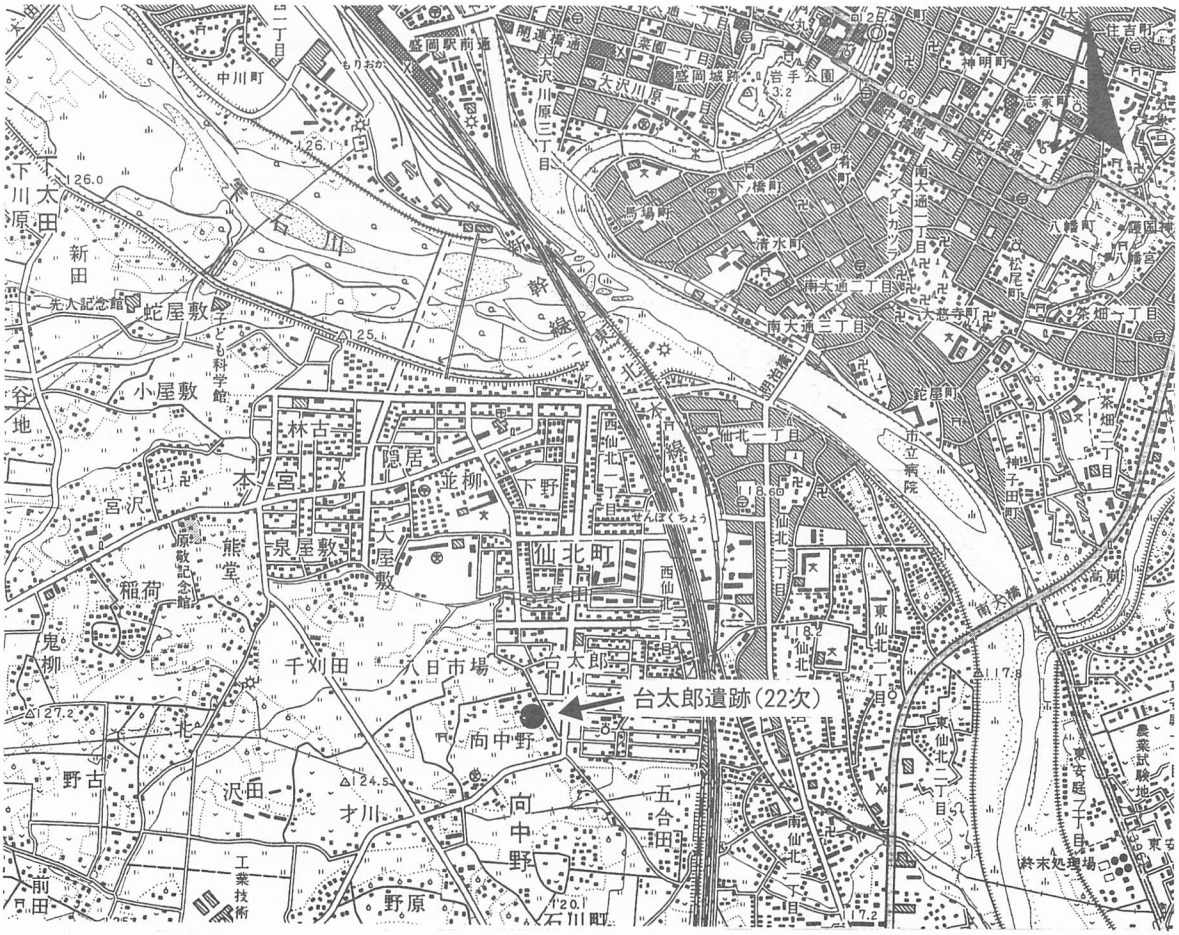
[写 真 図 版]

写真図版１　遺跡全景（遠景・近景） …… 46
写真図版２　検出遺構及び作業風景 …… 47
写真図版３　遺跡周辺の様子 …… 48
写真図版４　調査区全景（完掘）・基本層序 …… 49
写真図版５　調査区完掘状況・作業風景 …… 50
写真図版６　ＲＡ 301竪穴住居跡 …… 51
写真図版７　ＲＤ 825・826・827 土坑 …… 52
写真図版８　ＲＤ 828・829・830 土坑 …… 53
写真図版９　ＲＤ 831・832・833・834 土坑 …… 54
写真図版10　ＲＧ 273 堀跡 …… 55
写真図版11　ＲＧ 265・267・274・275 溝跡 …… 56
写真図版12　ＲＧ 276・277・278 溝跡 …… 57
写真図版13　ＲＧ 279 溝跡 …… 58
写真図版14　ＲＧ 280 溝跡・柱穴状土坑群 …… 59
写真図版15　遺構内出土遺物（1） …… 60
写真図版16　遺構内出土遺物（2）
　　遺構外出土遺物 …… 61

[　　表　　]

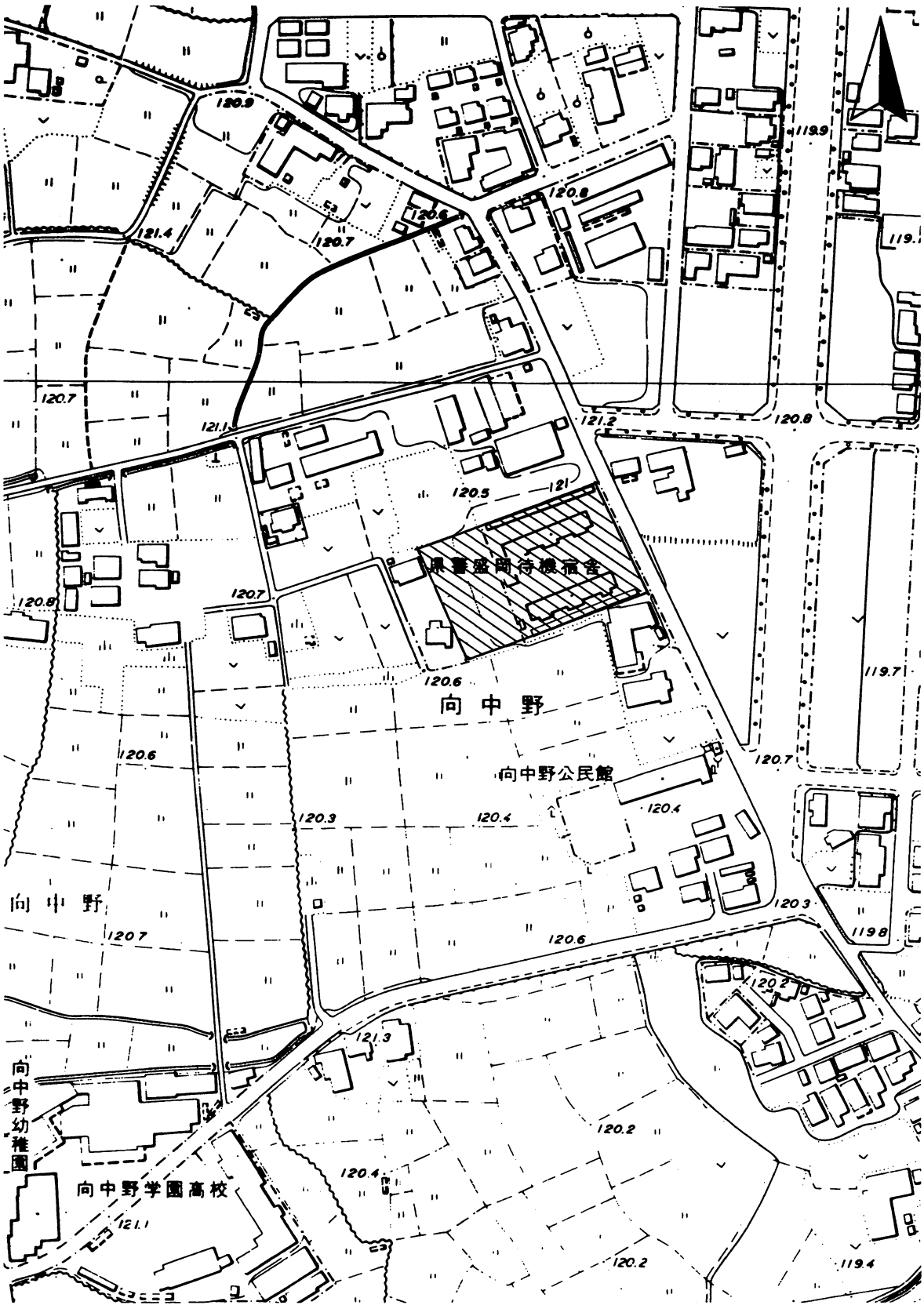
第１表　周辺の遺跡一覧（1） …… 7
第２表　周辺の遺跡一覧（2） …… 8
第３表　周辺の遺跡一覧（3） …… 9
第４表　堀跡・溝跡一覧 …… 23
第５表　柱穴状土坑一覧 …… 30
第６表　土器観察表（1） …… 31
第７表　土器観察表（2） …… 32
第８表　土器観察表（3） …… 33
第９表　土製品観察表 …… 33
第10表　陶磁器観察表 …… 33
第11表　金属製品観察表 …… 33





平成６年修正　1:25,000 盛岡

第１図　遺跡の位置及び遺跡周辺の地形図



1:2,500

第２図　遺跡周辺の地形図

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡東警察署警察官待機宿舎新築工事の施工にあたり、建設予定場所が台太郎遺跡内にあるため発掘調査を実施することになったものである。

建設予定場所は県有地であり、昭和39年に鉄筋コンクリート造りの宿舎2棟36世帯分が建設された。平成元年に、西側の旧埋蔵文化財センターの土地の所管換を受け広くなったが、その後の土地区画整理事業によって一部削減された。既存宿舎の老朽化に伴い、その土地に、鉄筋コンクリート造りの宿舎2棟56世帯分を新築することになった。

平成11年度に既存宿舎解体と新築宿舎の設計を実施し、平成12年度工事施工の予定であったが、平成10年4月に岩手県教育委員会文化課に確認したところ、建設予定場所が台太郎遺跡という県としても重要視している遺跡に当たるため、試掘調査なしで本調査をすることになった。

平成10年8月に県より平成11年度における埋蔵文化財関連開発事業計画について照会があり、本調査を依頼した。その後平成11年3月に埋蔵文化財センターと本調査のための事前打ち合わせを行い、同年8月に現地確認、同年9月1日より11月2日まで本調査を行ったものである。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

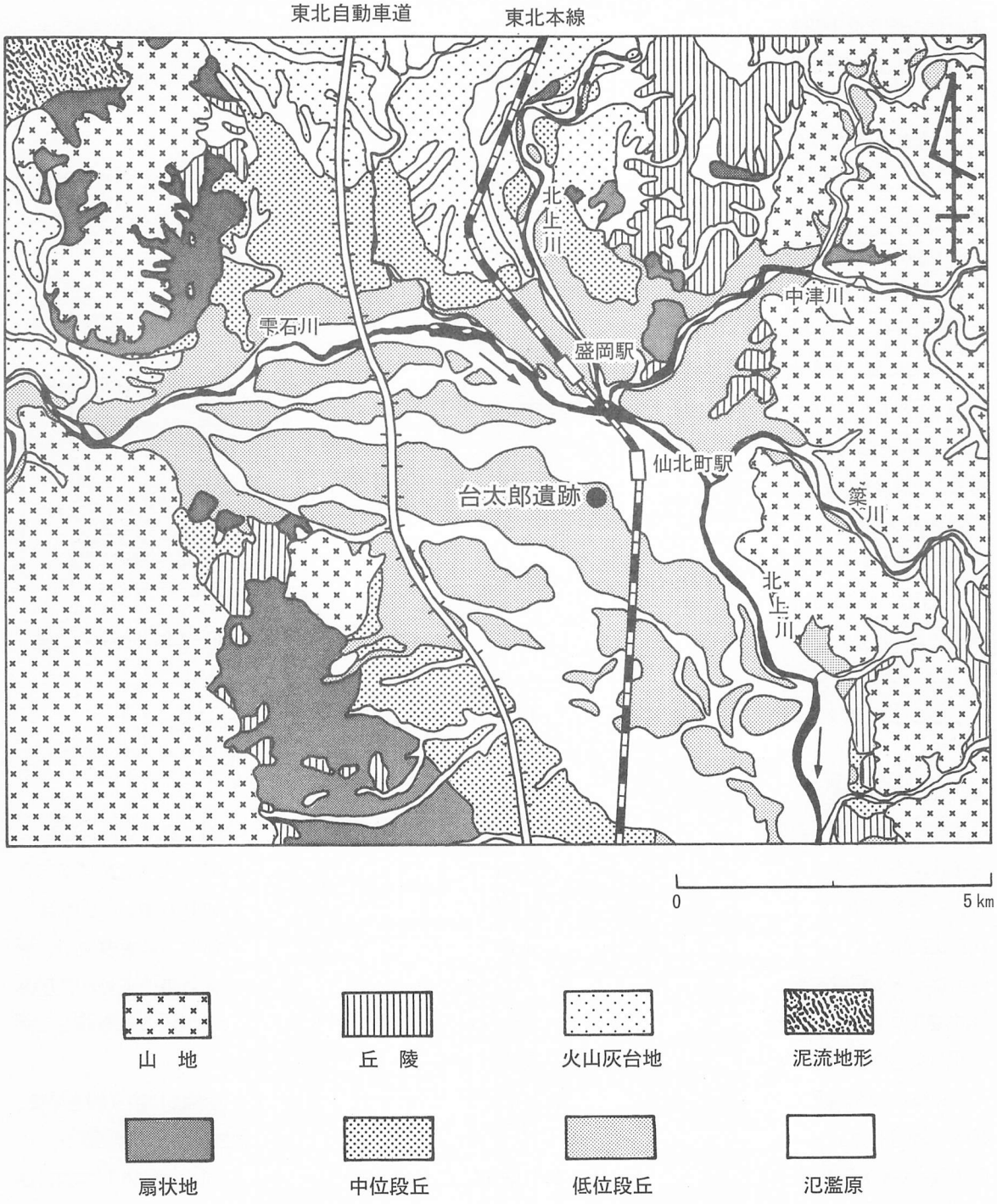
1．遺跡の立地

台太郎遺跡の所在する盛岡市は、岩手県の中央に位置し、北は岩手郡滝沢村・玉山村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は紫波郡紫波町・矢巾町・稗貫郡大迫町、西は岩手郡雫石町の5町3村と接している。面積は489.15㎢、人口約28万3千人の岩手県の県庁所在地であり、北東北の中核都市でもある。

台太郎遺跡は第1図に示すように、ＪＲ東北本線仙北町駅の南西側約900ｍに位置し、雫石川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」NJ－54－13－14－2（盛岡14号－2）の図幅に含まれ、北緯39度40分45秒、東経141度8分44秒付近に位置する。標高は120.6～121.3ｍで、現況は基礎の残る宅地跡である。

2．遺跡周辺の地形と地質

盛岡市は、市域の中央を流れる北上川が、西からの雫石川、東からの中津川・簗川と合流し南流する。さらに、東西から迫る山々に挟まれて形成された盛岡盆地を中心にその市街地が広がっている。市の北西には岩手山（2,038m）がコニーデ火山特有の裾野を東方に広げ、北東には姫神山（1,124.5m）が岩手山と向き合うようにその優美なシルエットを映し出している。また、南東には北上山地の最高峰、早池峰山（1913.5m）が定高性を示す周囲の山塊からひときわ抜きん出た山稜を望ませている。北上川は、主流部の延長243㎞、流域面積10,720㎢、支流数216を有する東北地方最大の河川で、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注ぐ。流域は、盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市狐禅寺を境にして上・中・下流に分けられ、盛岡市は中流域の上流部にあたる。中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって対照的な様相を呈し、新第三系および火山岩類を主体とする褶曲山脈である奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を北上川西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって開析され、段丘化している。対



第 3 図　遺跡周辺地形分類図

して、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側は山地に続く丘陵縁辺部に小規模な沖積地が観察されるにすぎない。北上川流域の第四系および地形の研究は中川久夫他の業績が大きく、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類した。中流域北部では、石鳥谷段丘、二枚橋段丘、都南段丘が上記の段丘に相当する。

3．遺跡の基本層序

調査区内の現状はほぼ平坦であるが、鉄筋コンクリート造の建築物の建設工事等が行われており、旧地表面の改変が著しい箇所も多く、表土下位の地層は一様ではない。第4図は調査区東側ⅡＤ４ｃ区で観察された土層断面の模式図であり、これを本遺跡の基本層序とした。

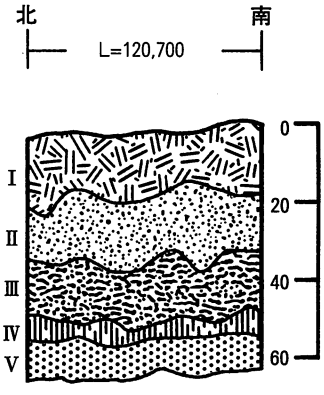
Ⅰ層：10YR2/3 黒褐色　粘性あり　締まり密　シルト　旧水田の床土と思われ、層厚は 10 ～ 20 ㎝。調査区の中央～南側で見られ、下部に薄く酸化鉄の集積が見られる。

Ⅱ層：10YR1.7/1　黒褐色　粘性あり　締まり密　シルト　Ⅴ層を少量含み、層厚は 10 ～ 13 ㎝。

Ⅲ層：10YR1.7/1　黒褐色　粘性あり　締まり密　シルト　Ⅴ層を 30 ～ 40 %含み、層厚は 13 ～ 17 ㎝。

Ⅳ層：10YR2/2　黒褐色　粘性あり　締まり密　シルト　層厚は 4 ～ 7 ㎝。Ⅴ層を少量含む。

Ⅴ層：10YR3/4　暗褐色　粘性あり　締まり密　砂質シルト　層厚は 60 ㎝前後。



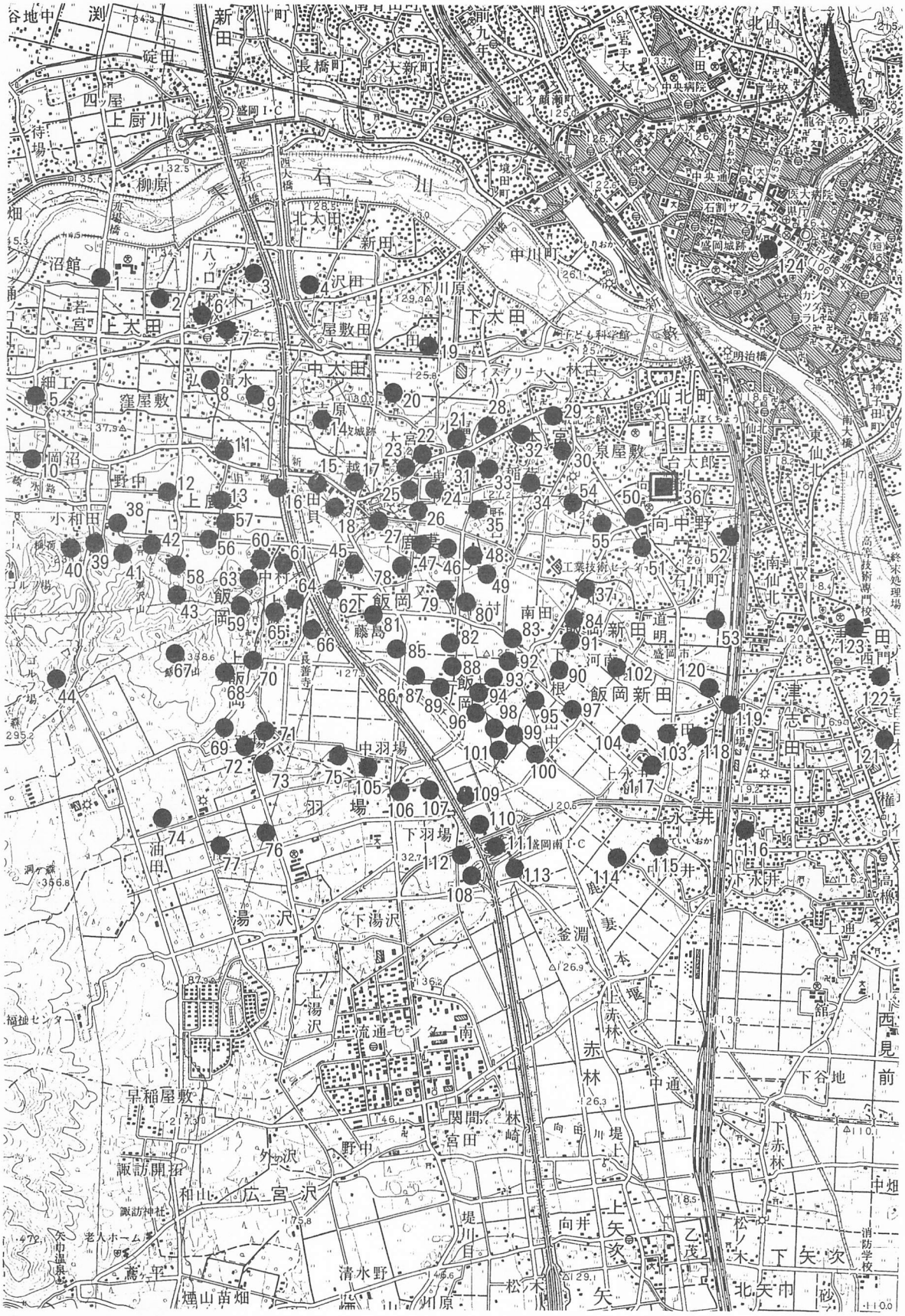
第４図　基本土層柱状図

※Ⅴ層の下には段丘の基盤をなす砂礫層があり、上部は砂と 3 ～ 5 ㎝の礫が混ざっている。

4．周辺の遺跡

平成 11 年度の岩手県教育委員会のまとめでは、盛岡市内には 508 カ所の遺跡が登録されている。遺跡の分布状況をみると、雫石川の左岸と右岸では対照的な様相を示している。左岸の台地状は大館遺跡群をはじめとした縄文時代の遺跡が数多く分布しているが、右岸の完新世段丘面上には古代の遺跡が多い。例えば、八卦遺跡などの 8 世紀代の集落遺跡、太田蝦夷森古墳群、803年に造営された城柵遺跡である志波城や、林崎遺跡などの集落遺跡が数多く分布している。縄文時代の遺跡は陥し穴遺構が散在する程度であり、住居跡や貯蔵穴などをもつ集落遺跡は確認されていない。このような遺跡の分布域の違いは立地する地形面と大きく関わるものと考えられ、時代による土地利用を考察する上で興味深い。

本遺跡の西北西側に位置する太田八丁遺跡は、昭和 51・52 年度の東北縦貫自動車道建設に伴う調査の後、盛岡市教育委員会による確認調査を経て、その所在が不明であった古代城柵の「志波城跡」と認定された。昭和 55 年度から 59 年度までの五カ年にわたる発掘調査によって、陸奥の国最北端の城柵遺跡として独自性が明らかになり、昭和 59 年には国の指定史跡となった。発掘調査は昭和 55 年から毎年行われる一方、平成 5 年度からは史跡保存事業も着手され、現在外郭南門と築地塀等が完成している。平成 9 年10月から「志和城古代公園」として一部が一般に公開されている。


盛岡I・C
盛岡南I・C
石川
中央病院
盛岡城跡
工業技術センター
高等技術専門校
終末処理場
流通センター
福祉センター
諏訪神社
諏訪明神
老人ホーム
消防学校

第５図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧（1）

No.	遺　跡　名	種　　別	時　代　等　／　　備　　考
1	細田	散布地	平安　／　土師器
2	松ノ木	集落跡	
3	八ツ口	散布地	古代　／　土師器　住居跡
4	八卦	集落跡	
5	太田蝦夷森古墳群	古墳	奈良　／　土師器　刀　玉　和銅開寶
6	館	集落跡	平安　／　土師器　住居跡　城館跡　堀　土塁
7	上野屋敷	散布地	古代　／　土師器
8	畑中	集落跡	平安　／　土師器
9	小沼	集落跡	平安　／　土師器　緑釉陶器　住居跡
10	一本木	集落跡	平安　／　土師器　住居跡
11	五兵衛新田	集落跡	古代　／　土師器
12	天沼	集落跡	古代　／　土師器
13	竹鼻	集落跡	古代　／　土師器
14	志波城	城柵跡	平安　／　掘立柱建物跡　門跡　築地　大溝　国指定史跡
15	田貝	集落跡	古代　／　土師器　住居跡
16	竹花前	集落跡	平安　／　土師器　緑釉陶器　住居跡
17	新堰端	城柵跡	縄文　／　縄文土器（晩）　古代住居跡　土師器　土坑　大溝
18	石仏	集落跡	古代　／　土師器
19	田中	散布地	平安　／　土師器
20	林崎	集落跡	平安　／　土師器　掘立柱建物跡
21	小幅	集落跡	平安　／　土器　住居跡　掘立柱建物跡
22	大宮	集落跡	古代・中世　／　土師器　住居跡
23	大宮北	集落跡	古代　／　土師器
24	鬼柳Ｂ	集落跡	古代　／　土師器
25	小林	集落跡	古代　／　土師器
26	水門	集落跡	古代　／　土師器
27	上越場Ａ	集落跡	古代　／　土師器
28	宮沢	集落跡	古代　／　土師器
29	本宮熊堂Ａ	集落跡	古代　／　土師器
30	本宮熊堂Ｂ	集落跡	古代　／　土師器
31	鬼柳Ａ	集落跡	古代　／　土師器
32	稲荷	集落跡	古代　／　土師器
33	鬼柳Ｃ	集落跡	古代　／　土師器
34	野古Ａ	集落跡	古代　／　土師器　住居跡
35	野古Ｂ	集落跡	古代　／　土師器
36	台太郎	集落跡	古代　／　土師器　住居跡　掘立柱建物跡　堀跡　**報告遺跡**
37	矢盛	集落跡	古代　／　土師器　住居跡　墓壙
38	蟹沢下	散布地	古代　／　土師器
39	二ッ沢	散布地	縄文・古代　／　縄文土器（中・後）　土師器
40	小和田館	城館跡	中世　／　堀　郭
41	蟹沢	散布地	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
42	ヘビ堂	散布地	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
43	オミ坂	散布地	縄文・古代　／　縄文土器（草～晩）　土師器

第２表　周辺の遺跡一覧（2）

No.	遺　跡　名	種　　別	時　代　等　／　　備　　考
44	大ヶ森	散布地	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
45	辻屋敷	集落跡	古代　／　土師器
46	西田Ａ	集落跡	古代　／　土師器
47	上越場Ｂ	集落跡	古代　／　土師器
48	西田Ｂ	集落跡	古代　／　土師器　須恵器
49	前田	集落跡	古代　／　土師器
50	向中野館	城館跡	中世　／　堀　土塁
51	細谷地	集落跡	古代　／　土師器
52	南仙北	集落跡	縄文・古代　／　縄文土器　土師器　住居跡
53	向中野幅	集落跡	古代　／　土師器
54	飯岡沢田	集落跡	古代　／　住居跡
55	飯岡才川	集落跡	古代
56	中村	散布地	平安　／　土師器　須恵器
57	月見山	散布地	縄文・古代　／　土器
58	山中	散布地	縄文・古代　／　縄文土器（草・中）　土師器
59	飯岡館	城館跡	中世　／　空堀　縄文土器（中）
60	堤	散布地	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
61	高館古墳群	古墳	奈良～平安　／　蕨手刀　切小玉　土師器
62	藤島Ⅱ	散布地	平安？　／　土師器
63	高館	散布地	縄文　／　縄文土器（中）　石器
64	大柳Ⅰ	集落跡	古代　／　土師器　須恵器
65	大柳Ⅱ	散布地	古代？　／　土師器？
66	館野前	散布地	縄文　／　縄文土器（後）
67	飯岡山館	城館跡	中世
68	飯岡赤坂	散布地	古代
69	いたこ塚	祭祀跡	近世
70	赤坂Ⅱ	散布地	平安？　／　土師器
71	羽場館	城館跡	中世　／　空堀
72	羽場百目木	散布地	縄文　／　縄文土器（中）
73	砂子塚	散布地	古代　／　小塚
74	アイノ沢	散布地	縄文　／　縄文土器（晩）
75	因幡	散布地	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
76	木節	集落跡	平安
77	福千代	集落跡	奈良
78	二又	散布地	古代　／　土師器　須恵器
79	内村	集落跡	平安　／　土師器　常滑
80	中屋敷	散布地	古代　／　土師器
81	藤島Ⅰ	集落跡	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
82	深淵Ⅰ	集落跡	平安　／　住居跡
83	高屋敷	散布地	古代　／　須恵器
84	法嶺権現塚	祭祀跡	
85	飯岡林崎Ⅱ	集落跡	古代　／　土師器　須恵器　硯　住居跡

第3表　周辺の遺跡一覧（3）

No.	遺　跡　名	種　　別	時　代　等　／　備　　考
86	飯岡林崎	集落跡	平安　／　土師器
87	上新田	集落跡	平安　／　土師器　住居跡
88	深淵Ⅱ	集落跡	平安　／　住居跡
89	上新田Ⅰ	集落跡	平安　／　住居跡
90	下久根Ⅰ	散布地	縄文・古代　／　縄文土器　土師器
91	石持	散布地	古代　／　縄文土器　須恵器
92	高屋敷Ⅱ	散布地	古代　／　土師器　須恵器
93	西	集落跡	平安　／　土師器　住居跡
94	西田	集落跡	平安　／　須恵器
95	下久根Ⅱ	散布地	縄文・古代　／　縄文土器
96	熊堂Ⅰ	集落跡	縄文・古代　／　縄文土器　石器　土師器　住居跡
97	松島	集落跡	古代　／　土師器　須恵器
98	熊堂Ⅲ	集落跡	古代　／　土師器　須恵器　住居跡
99	熊堂Ⅱ	集落跡	古代　／　土師器　須恵器　住居跡
100	田中	集落跡	古代　／　土師器　須恵器　石器
101	南谷地	集落跡	古代　／　土師器　須恵器　住居跡
102	夕覚	散布地	古代　／　土師器
103	横屋	集落跡	古代　／　土師器　須恵器
104	葛本	散布地	古代　／　土師器　石器
105	新井田Ⅰ	散布地	古代　／　土師器　須恵器
106	新井田Ⅱ	散布地	古代　／　土師器　須恵器
107	新田	集落跡	古代　／　土師器　須恵器
108	間渡	散布地	古代　／　土師器
109	下羽場	集落跡	平安　／　土師器　須恵器　緑釉陶器
110	下湯沢	散布地	古代　／　土師器　須恵器
111	大島	散布地	古代　／　土師器　須恵器
112	湯壺	散布地	縄文　／　縄文土器（晩）　石器
113	湯壺経塚	経塚	中世　／　常滑
114	後島	散布地	縄文　／　縄文土器　石器
115	湯沢	散布地	縄文　／　縄文土器（前・中・後）　石器
116	島	墳墓	不明　／　小塚
117	小田Ⅰ	散布地	古代　／　土師器
118	間渡Ⅱ	散布地	古代　／　土師器　須恵器
119	間渡Ⅲ	散布地	古代　／　土師器　須恵器
120	森子	散布地	古代　／　土師器
121	小田Ⅱ	散布地	古代　／　土師器
122	湯沢大館	城館跡	古代～中世　／　土師器　須恵器
123	狢沢	散布地	古代　／　土師器
124	盛岡城	城館跡	中世・近世　／　瓦　陶磁器　その他

＜参考・引用文献＞

(1) 1996年　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「小幅遺跡第 2 次発掘調査報告書」文振報第 244 集
(2) 1998年　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「小幅遺跡第 5 次・ 7 次発掘調査報告書」文振報第 267 集
(3) 1999年　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「熊堂 B 遺跡第 5 次・台太郎遺跡第 16 次発掘調査報告書」文振報第 293 集
(4) 1999年　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「台太郎遺跡第 15 次発掘調査報告書」文振報第 309 集

Ⅲ　調査の方法と室内整理

1．野外調査の方法

(1) 調査区のグリッド設定

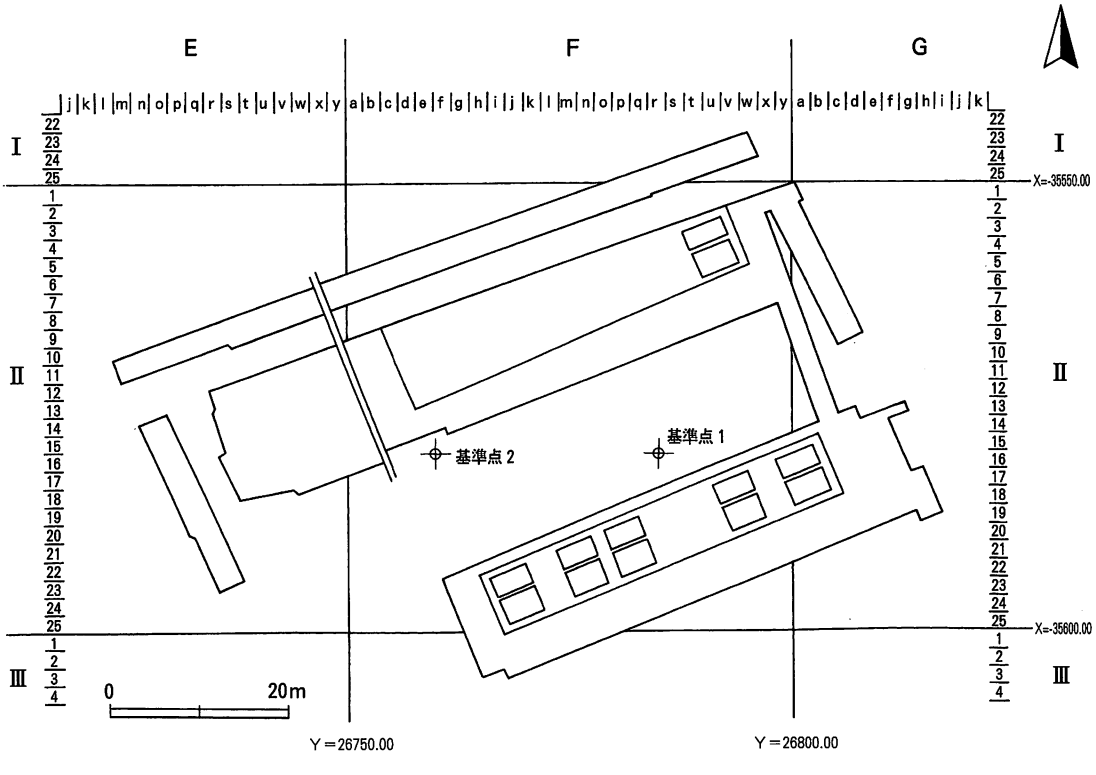
台太郎遺跡の区割設定にあたっては、盛岡市教育委員会の方法に準じている。台太郎遺跡全域の調査座標原点はX＝－35,000.00、Y＝＋26,500.00である。この各原点を基点として遺跡全体に一辺50ｍ×50ｍの大区画を設定し、更にこれを一辺2ｍ×2ｍの小区画（25区画）に細分した。大区画は原点から東に向かってアルファベット大文字のＡ～Ｇ、南に向かってＩ～Ⅲの数字を付してＩＡ，ⅡＡ…とし、小区画は東に向かってアルファベット小文字のａ～ｙ、南に向かって1～25の数字を付し1ａ，2ａと表した。調査区の名称はこの大区画と小区画を組み合わせＩＥ22ｊやⅡＧ19ｇのように表現している。本調査区は大グリッドでいうところのＩＦ、ⅡＥ、ⅡＦ、ⅡＧ、ⅢＦ区にあたる。実際のグリッド設定にあたっては、原点と調査区に距離があるため、調査区付近に基準点として2点を設定した。各基準点の成果値と杭高（標高）は次のとおりである。

基準点1　X＝－35,580.00　Y＝＋26,785.00　H＝121.203

基準点2　X＝－35,580.00　Y＝＋26,760.00　H＝121.356

(2) 粗掘と遺構検出

盛岡南新都市開発整備事業に関わって、平成7年度に盛岡市教育委員会により台太郎遺跡の全域に対して幅2ｍのトレンチ（試掘溝）が設定され、試掘調査が実施されている。台太郎遺跡では33,390㎡に対して



第6図　グリッド配置図

８６本のトレンチ（試掘溝）が設定され、5,174㎡の試掘調査が行われた。今回の調査対象区域については台太郎遺跡の一部であり、遺構、遺物の検出・出土状況がある程度把握されていたが、更に12カ所のトレンチ（試掘溝）を設定し土層の状況把握に努めた。調査前から鉄筋コンクリート造りの建物の基礎が残存していることが確認されていたが、基礎を除去することによって遺構を破壊してしまうおそれがあったため、粗掘には重機（バックホー）を使用し、基礎を残しながら行った。その際、基礎の他に建物に伴うと思われるガス・水道・排水等のパイプ類や施設が確認された。粗掘後は、人力によって遺構検出を行った。

(3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会の方法に準じ、下記の通り行った。各遺構の番号は台太郎遺跡第23次調査からの通し番号で付している。種別を決めかねた遺構については全てＲＺとして扱っている。欠番となっているものは調査、整理作業の過程で遺構としての認定から除外したものである。

竪穴住居跡……ＲＡ　掘立柱建物跡……ＲＢ　柱穴列……ＲＣ　土坑……ＲＤ
竪穴状遺構……ＲＥ　炉・焼土遺構……ＲＦ　溝　跡……ＲＧ　井戸……ＲＩ
その他の遺構…ＲＺ

(4) 遺構の精査と実測

検出された遺構は竪穴住居跡・竪穴状遺構は4分法、土坑類は2分法を原則として精査を行い、必要に応じて適宜併用した。記録として必要な図面の作成は精査の各段階において平板測量によって縮尺１／２０で作成した。遺構内からの出土遺物は、床面直上のものは写真撮影、図面作成後に取り上げた。

(5) 写真撮影

野外での写真撮影は35㎜判カメラ2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7㎝判カメラ（モノクロ）を使用し、遺構の平面・断面、遺物の出土状況などを中心に行った。遺構によっては、6×7㎝判（モノクロ）での撮影を省略したものもある。また、調査終了近くには、セスナ機による空中写真撮影を実施した。

2．室内整理の方法

(1) 作業手順

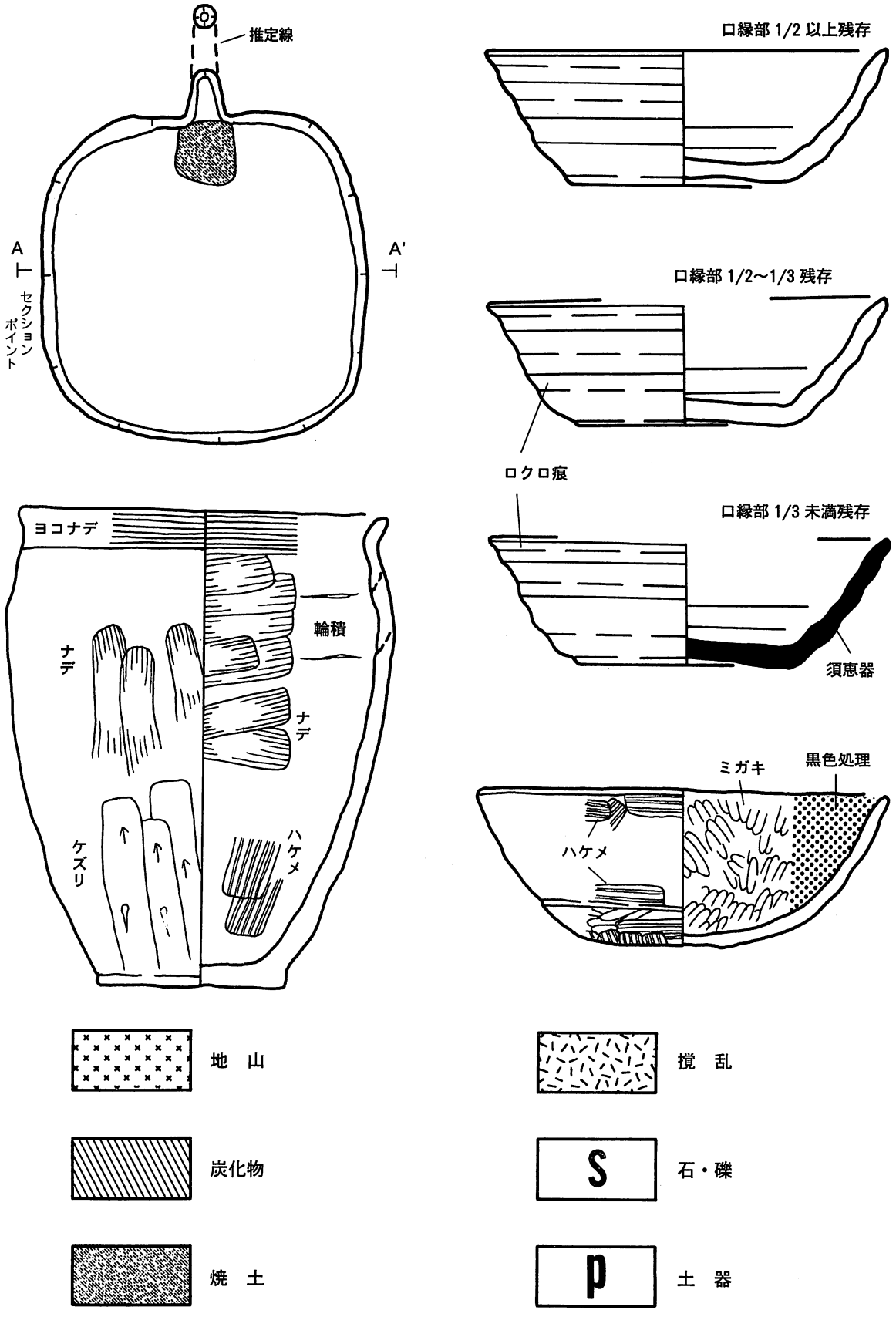
室内整理は現場で残った遺物の水洗・注記から始め、遺物の仕分け、接合復元、写真撮影、拓本作成、実測、遺物のトレースの順に行った。実測図については点検・合成の後にトレースを行い、図版・写真図版の作成を順次進めた。

(2) 遺構

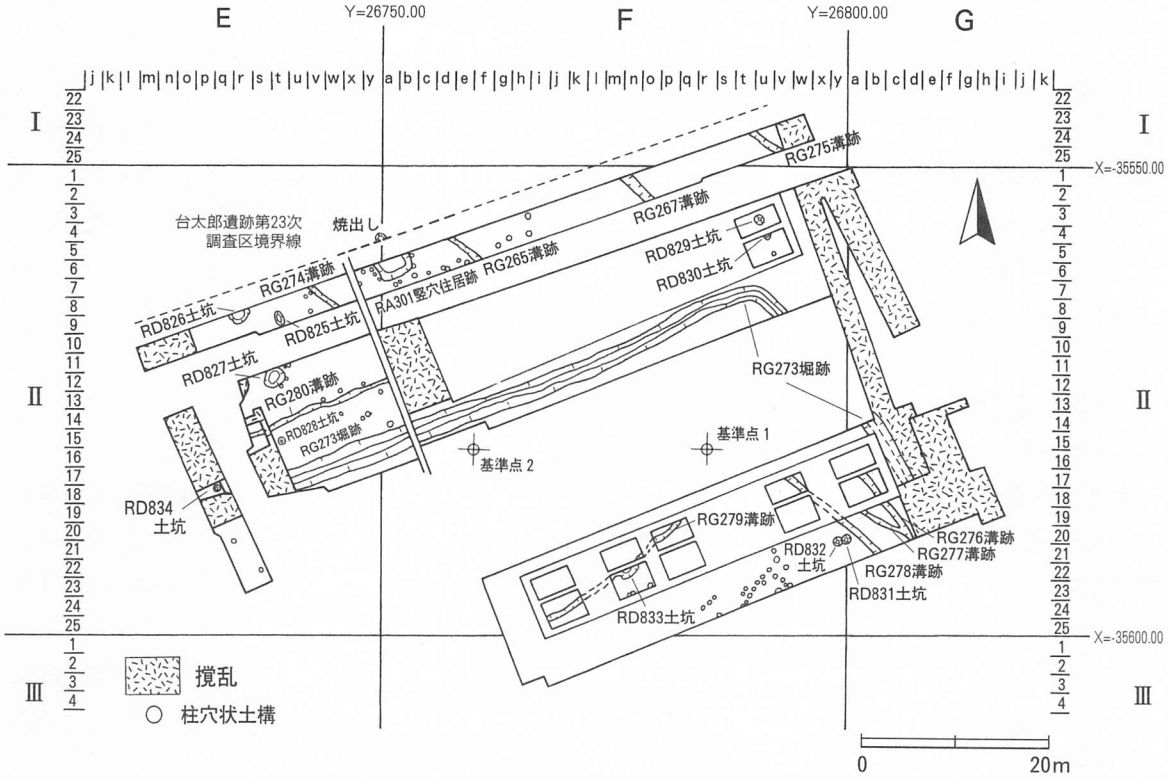
遺構配置図は、発掘調査時に作成した実測図を基に１／400の縮尺図を作成し、１／800で掲載している。各遺構の平面・断面図は次の縮尺で掲載しているが、一部には例外もあり、その際には各図面にスケールを付した。竪穴住居跡および煙出し部の平面図・断面図１／50、土坑の平面・断面図１／40、堀跡の平面図１／200、断面図１／50、溝跡の平面・断面図１／50、柱穴状土坑群の平面図１／60である。

(3) 遺物

土器の実測は、原則として反転実測が可能なものに限定し、残存率は口縁上端部で区別できるよう表現している。また、反転実測に適さない破片は拓本を掲載している。各掲載遺物の縮尺は土器、陶磁器、金属製品は１／２、土製品は１／３である。


推定線
A
A'
セクションポイント
口縁部 1/2 以上残存
口縁部 1/2～1/3 残存
ロクロ痕
口縁部 1/3 未満残存
須恵器
ヨコナデ
輪積
ナデ
ナデ
ケズリ
ハケメ
ミガキ
黒色処理
ハケメ
地　山
炭化物
焼　土
撹　乱
S
石・礫
p
土　器

第 7 図　凡例



第8図　台太郎遺跡第22次調査遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1．概　　要

第22次調査で検出した遺構は、竪穴住居跡１棟（奈良時代）、土坑10基（縄文時代１基、奈良時代１基、中世２基、時期不明６基）、堀跡１条（平安時代）、溝跡９条（時期不明９条）、柱穴状土坑62基である。出土した遺物の大半は奈良・平安時代の土師器で占められており、器種はほとんどが坏、甕である。土製品では竪穴住居跡からフイゴの羽口が、金属製品では「開元通宝」と「寛永通宝」が土坑と埋土からそれぞれ出土している。

2．竪穴住居跡

ＲＡ301竪穴住居跡

＜位置＞調査区のⅡＥ６ｙ区～ⅡＦ５ｂ区に位置し、Ⅴ層上面で黒褐色土の広がりによって検出している。

＜平面形・規模＞北壁は調査区外にあると思われる。また、東・西壁の一部が調査区外へ伸びているため規模の全容は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈していると思われる。今回確認された規模は3.71 × 1.85 mである。

＜埋土＞黒色・黒褐色シルトを主体とした５層に大別することができる。最も層厚のある２層は黒褐色土で土器片と少量の炭化物を含んでいる。撹乱を受けている部分も見られるが、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

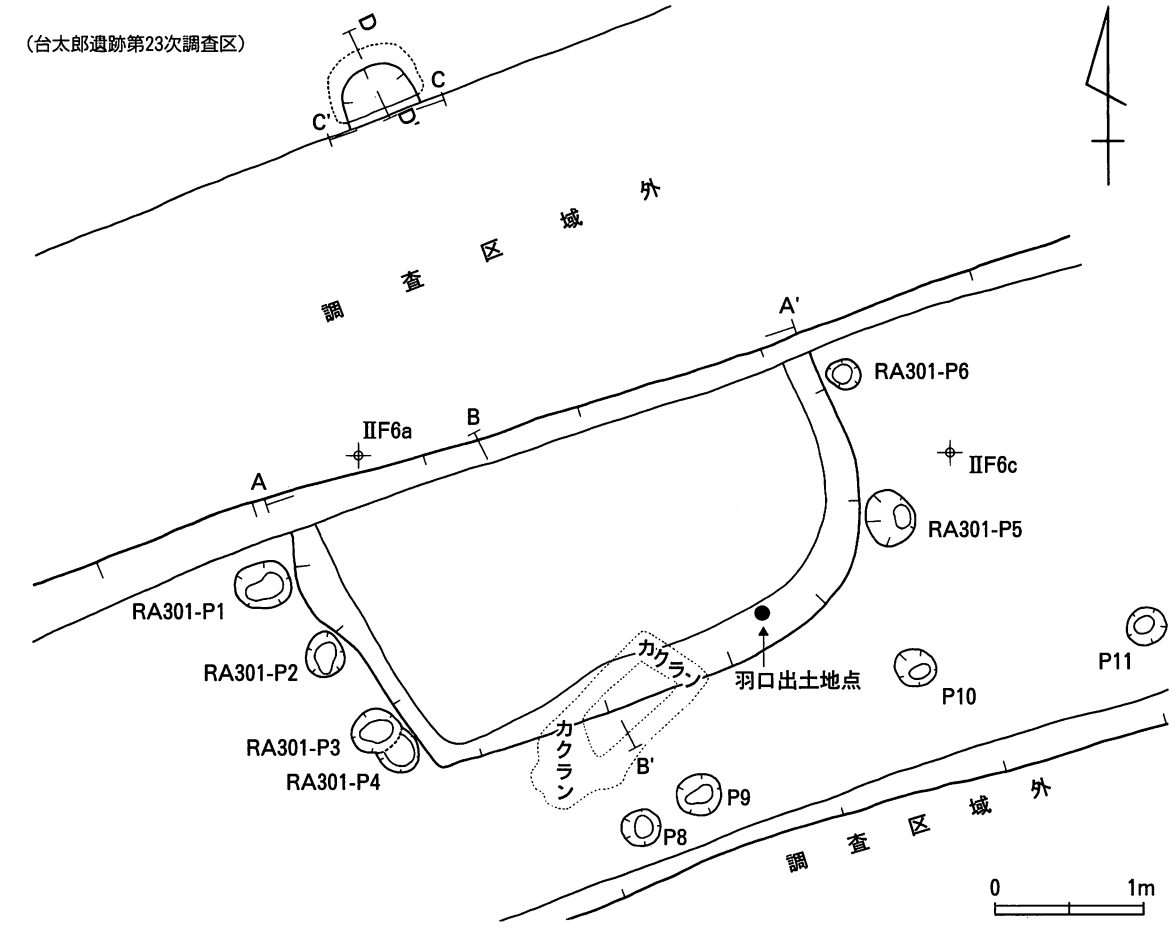
＜壁・床＞壁は床面から外傾して立ち上がっており、壁高は南壁で37 ㎝、西壁で38 ㎝、東壁で36.5 ㎝である。床面は平坦であるが南側が若干高くなっており、堅く締まっている。

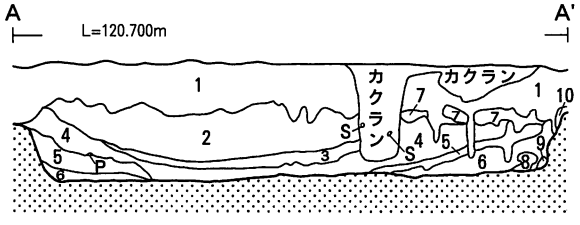
＜柱穴・土坑＞柱穴状土坑は、床面からは検出できなかったが、壁外から計６基（西壁外から４基、東壁外から２基）検出している。これらの径は22 ～ 38 ㎝、深さ６～ 20㎝、平面形はＲＡ301 - Ｐ１～Ｐ５が楕円形、ＲＡ301 - Ｐ６が円形である。いずれの柱穴状土坑からも柱痕は確認できなかった。

＜カマド＞北壁の中央付近にあるものと思われるが、調査区外であるため検出できなかった。ただし、隣接する第23次調査区で煙出し部分のみ確認することができた。径は50 × 30 ㎝で、深さは38.5 ㎝である。煙道部も調査区外にあるため、掘り込み式・刳り抜き式の別は不明である。最も煙出し部に近い床面に対して、煙出し部が標高差で19 ㎝高くなっているということを考えると、緩やかな登り勾配で煙道部が煙出し部に至るものと思われる。

＜遺物＞埋土中位及び床面より土器片が、南壁東隅寄りからフイゴの羽口が出土している。１は土師器の小型の坏である。２・３は土師器の甕の底部である。２の内面にはハケメ痕が見られ、３の外面はナデ調整されている。４は土師器の坏の底部で、内・外底面とも丁寧なミガキが施され、更に内面は黒色処理されている。５は土師器の甕の口縁部で内面がナデ、外面がヨコナデ調整されている。１～５のどの土器についてもロクロを使用して成形した痕跡は見られない。23は南壁東隅寄りから、床面に対して直立するように出土したフイゴの羽口で、全長は33.3 ㎝、中空で外径は3.62 ～ 5.24 ㎝、内径は1.20 ～ 1.62 ㎝である。非常にもろく、太い亀裂が縦方向に幾重にも見られることを考えると、焼成されたものではないようである。また、相当の高温下で使用された痕跡はないとの自然科学的調査の結果から、実際には羽口としては使用されず他の用途に用いられたとも考えられるが、出土した地点の周囲にはこれに関連すると思われる遺構、遺物ともないため、詳細については不明である。

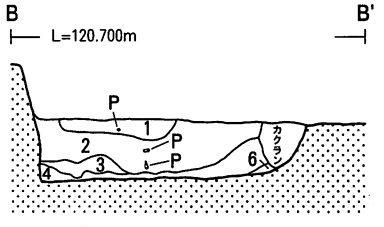
＜時期＞出土した土器から奈良時代と思われる。





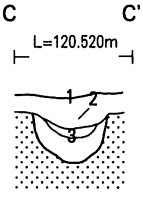
RA301住居跡（北断面）

1層：10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(酸化鉄を含む)
2層：10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山粒を40%含む)
3層：10YR1.7/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(炭水化物を少量含む)
4層：10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を少量と酸化鉄を含む)
5層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(上部に土器片あり)
6層：10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(地山粒を40%含む)
7層：10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山粒を少量含む)
8層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト(炭水化物を少量含む)
9層：10YR1.7/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(炭水化物を少量含む)
10層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト



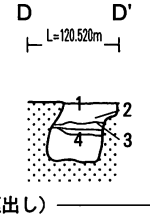
RA301住居跡（東断面）

1層:10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を少量と酸化鉄を含む・土器片有り)
2層:10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を少量と地山粒を30%含む・土器片有り)
3層:10YR1.7/1・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト(炭化物を少量含む)
4層:10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を少量と酸化鉄を含む)
6層:10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まり密・シルト(地山粒を40%と酸化鉄を極少量含む)



RA301住居跡（煙道）

1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや疎・シルト
2層：10YR4/4・褐　色・粘性ややあり・締まりやや疎・砂質シルト(1層を含む)
3層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや疎・シルト
(地山ブロックを10%と炭化物を含む)



RA301住居跡（煙出し）

1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや疎・シルト(地山ブロックを10%含む)
2層：10YR4/4・褐　色・粘性ややあり・締まりやや疎・砂質シルト(1層を含む)
3層：10YR4/6・褐　色・粘性あり・締まりやや密・砂質シルト(1層を含む)
4層：10YR3/3・暗褐色・粘性あり・締まり密・シルト

第9図　RA301竪穴住居跡

3．土　坑

ＲＤ 825 土坑

＜位置＞ⅡＥ８ｔ区とⅡＥ９ｔ区の境界線上に、南北方向にわたって位置している。

＜平面形・規模＞平面形は溝状をしており、開口部の長軸 1.2 m、短軸 31 ㎝、深さ 45 ～ 46 ㎝である。形状から陥し穴と思われるが、床面に逆茂木痕は見られない。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした 4 層に大別できる。下位 2 層に対して、上位 2 層が堅く締まっている。

＜出土遺物＞埋土から土師器片がわずかに出土している。

＜時期＞形状から縄文時代と思われる。

ＲＤ 826 土坑

＜位置＞ⅡＥ８ｒ区とⅡＥ９ｒ区にわたって位置している。

＜平面形・規模＞北側半分が調査区外に位置していると思われるため全容は不明であるが、平面形は楕円形をしているものと思われる。今回確認された規模は、開口部で 1.73 × 0.98 m、深さ 22.5 ～ 26.0 ㎝である。

＜埋土＞黒褐色土を中心とした 7 層からなる。1 層は近年の柱穴によると思われる撹乱を受けており、2 層は黒色シルトで炭化物と土器片を含んでいる。

＜出土遺物＞埋土から土師器片がわずかに出土している。

＜時期＞出土した遺物から時期を推定できないため不明である。

ＲＤ 827 土坑

＜位置＞ⅡＥ11ｔ区、ⅡＥ12ｓ区、ⅡＥ12ｔ区にわたって位置している。

＜平面形・規模＞平面形は不整形をしており、開口部は 2.34 × 1.98 m、深さは 35.5 ㎝である。

＜埋土＞黒色土、黒褐色土で構成される 7 層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。南西側の壁面下部から床面にかけて焼土が検出された。検出された位置や、焼土の締まりが疎である点から移地性の可能性が高いと思われる。

＜遺物＞ 6 は埋土の上位から出土した坏で、外面にはハケメ調整痕が見られる。内面には黒色処理とミガキが施されている。7 は埋土の上位から出土した縄文土器で、深鉢の口縁部～体部である。地文にはＬＲ単節縄文を横方向に施している。8 は埋土の中位から出土した甕の口縁部である。外面・内面ともヨコナデ調整が施される。9 は埋土の中位から出土した甕の頸部である。外面にはヨコナデとハケメ調整痕が、内面にはヨコナデ調整痕が見られる。10 は甕の口縁～頸部で、口縁部は頸部から外傾して立ち上がっている。11 は甕の口縁部で、外面・内面ともハケメ調整が施されている。12 は球胴甕の体部上半である。外面にはハケメ調整が施され、内面には輪積痕が明確に確認できるほか、ハケメ調整痕も見られる。

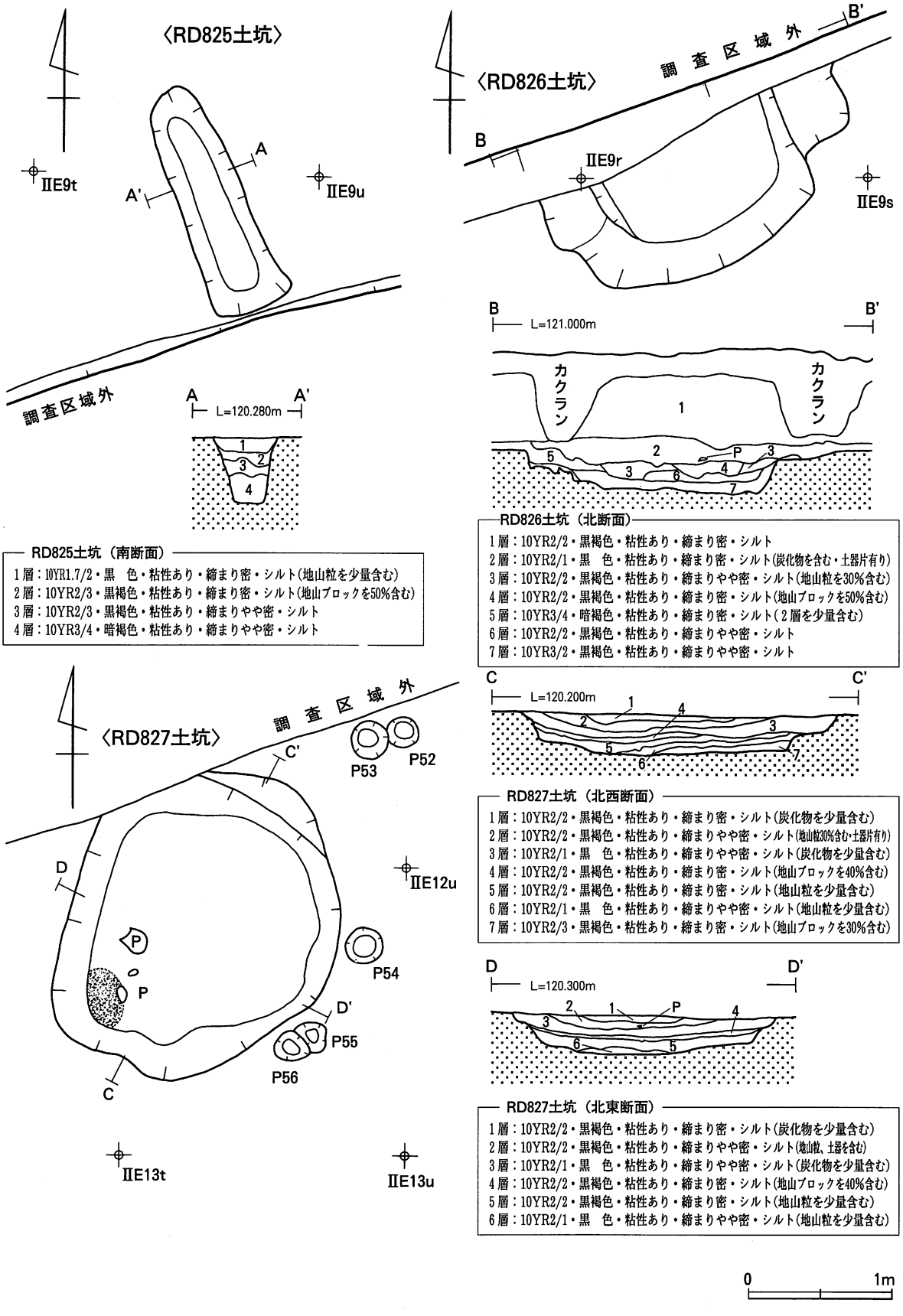
＜時期＞出土した遺物から奈良時代と思われる。

ＲＤ 828 土坑

＜位置＞ⅡＥ15ｔ区に位置している。

＜平面形・規模＞平面形は円形をしており、開口部は 60 × 52.5 ㎝、深さ 23.5 ㎝である。

＜埋土＞黒褐色、暗褐色土の 2 層からなり、1 層は地山ブロックを約 20 ％含んでいる。



RD825土坑（南断面）

1層：10YR1.7/2・黒　色・粘性あり・締まり密・シルト(地山粒を少量含む)
2層：10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山ブロックを50%含む)
3層：10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト
4層：10YR3/4・暗褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト

RD826土坑（北断面）

1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト
2層：10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を含む・土器片有り)
3層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト(地山粒を30%含む)
4層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山ブロックを50%含む)
5層：10YR3/4・暗褐色・粘性あり・締まり密・シルト(2層を少量含む)
6層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト
7層：10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト

RD827土坑（北西断面）

1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を少量含む)
2層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト(地山粒30%含む・土器片有り)
3層：10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(炭化物を少量含む)
4層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山ブロックを40%含む)
5層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山粒を少量含む)
6層：10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(地山粒を少量含む)
7層：10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山ブロックを30%含む)

RD827土坑（北東断面）

1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(炭化物を少量含む)
2層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト(地山粒、土器を含む)
3層：10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(炭化物を少量含む)
4層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山ブロックを40%含む)
5層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(地山粒を少量含む)
6層：10YR2/1・黒　色・粘性あり・締まりやや密・シルト(地山粒を少量含む)

第10図　RD825・826・827土坑

<出土遺物>出土遺物はない
<時期>時期は不明である。

ＲＤ 829 土坑
<位置>ⅡＦ３ｕ区に位置し、ＲＤ 830 土坑と並んでいる。
<平面形・規模>平面形は楕円形をしており、開口部は 62 × 52.5 ㎝、深さ 25.5 ㎝である。
<埋土>黒褐色砂質シルトの単層からなり、締まりは疎である。水分が多く含まれており、小礫も混ざっている。
<出土遺物>出土遺物はない。
<時期>時期は不明である。

ＲＤ 830 土坑
<位置>ⅡＦ４ｕ区に位置し、ＲＤ 829 土坑と並んでいる。
<平面形・規模>アパートの基礎により北側が壊されているため全容は不明であるが、平面形は楕円形をしていると思われる。今回確認された部分の規模は、開口部が 95 × 37 ㎝、深さ 44.5 ㎝である。
<埋土>黒褐色土の単層からなり、締まりは疎である。下層の東側にはには径約 5 ㎝程度の丸い小石が見られる。
<出土遺物>出土遺物はない。
<時期>時期は不明である。

ＲＤ 831 土坑
<位置>ⅡＦ20ｙ区～ⅡＧ20ａ区に位置し、ＲＤ 832 土坑と並んでいる。
<平面形・規模>平面形は円形をしており、開口部は 79.5 × 76㎝、深さ 19.5 ㎝である。
<埋土>黒褐色土の単層からなり堅く締まっている。少量の炭化物と下層に地山ブロックを含んでいる。
<出土遺物>摩滅した土師器の小片が出土している。
<時期>隣接するＲＤ 832 土坑と位置、規模が類似しているため中世の墓壙と思われる。

ＲＤ 832 土坑
<位置>ⅡＦ20ｙ区～ⅡＦ21ｙ区に位置し、ＲＤ 831 土坑と並んでいる。
<平面形・規模>平面形は円形をしており、開口部は 83 × 79 ㎝、深さ 22 ㎝である。
<埋土>黒褐色土の単層からなり、ＲＤ 831 と同様に少量の炭化物と下層に地山ブロックを含んでいる。
<出土遺物>底部より開元通宝が１枚出土している。
<時期>出土した遺物から中世の墓壙と思われる。

ＲＤ 833 土坑
<位置>ⅡＦ22ｎ区に位置している。ＲＧ 279 溝跡と重複関係にあるが、ＲＧ 279 溝跡を切っていることからＲＤ 833 土坑の方が新しい。
<平面形・規模>北西側をアパートの基礎によって壊されているため平面形、規模の全容は不明であるが、

〈RD828土坑〉

A　A'　A　A'

L=120.300m

1　2

RD828土坑（北断面）
1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト（地山粒を20%含む）
2層：10YR3/4・暗褐色・粘性あり・締まりやや密・シルト（1層を少量含む）

〈RD829土坑〉

B'　S　B

IIF4u

B　B'

L=120.500m

S　1

RD829土坑（西断面）
1層：10YR2/2・黒褐色・粘性ややあり・締まり疎・砂質シルト
（水分多く、小礫を少量含む）

〈RD830土坑〉

C'　S　C

IIF5v

C　C'

L=120.500m

S　1　S　S　2

RD830土坑（北断面）
1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり疎・シルト
（下層に径約5㎝の丸形の小石を含む）

〈RD831土坑〉

D'　D

IIG21a

D　D'

L=120.400m

1　2　S　1

RD831土坑（西断面）
1層：10YR2/2・黒褐色・粘性ややあり・締まり密・シルト
（炭化物を少量と下層に地山ブロックを含んでいる）

〈RD832土坑〉

E'　IIF21y　E

E　E'

L=120.400m

1

RD832土坑（西断面）
1層：10YR2/2・黒褐色・粘性ややあり・締まり密・シルト
（炭化物を少量と下層に地山ブロックを含んでいる・底部より「開元通宝」出土）

IIF22n

F　F'

〈RD833土坑〉

〈RG279溝跡〉

F　F'

L=120.200m

1

RD833土坑（東断面）
1層：10YR2/3・黒褐色・粘性ややあり・締まり密・シルト

調査区域外

G'　G

〈RD834土坑〉

G　G'

L=120.200m

1

RD834土坑（北断面）
1層：10YR3/3・暗褐色・粘性あり・締まり密・シルト

撹乱　コンクリート基礎　0　1m

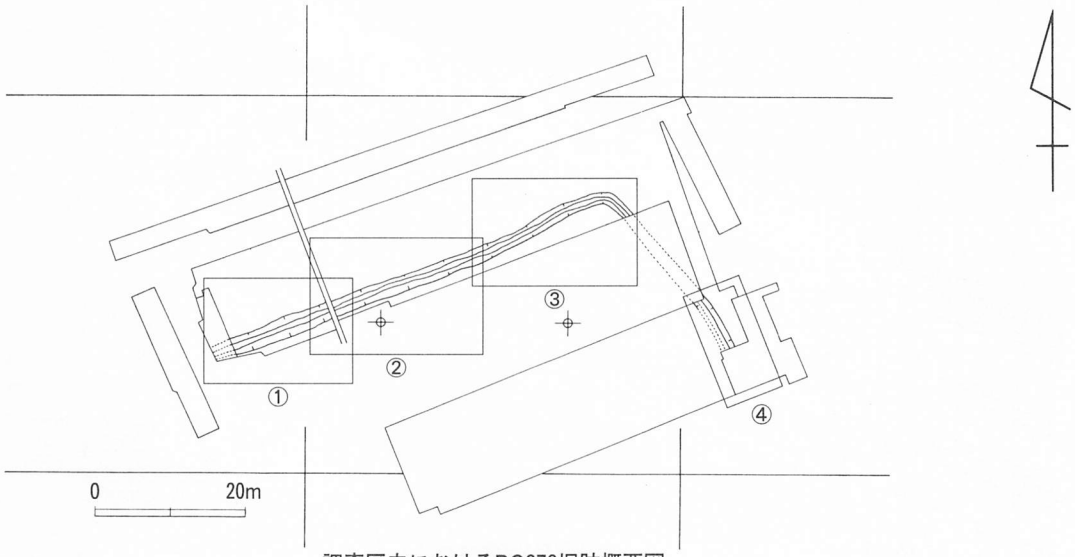
第11図　RD828・829・830・831・832・833・834土坑

平面形は隅丸長方形をしていると思われる。今回確認された規模は 2.02 × 1.1 m、深さ 18 ㎝である。
<埋土>黒褐色土の単層からなり、堅く締まっている。
<出土遺物>出土遺物はない。
<時期>時期は不明である。

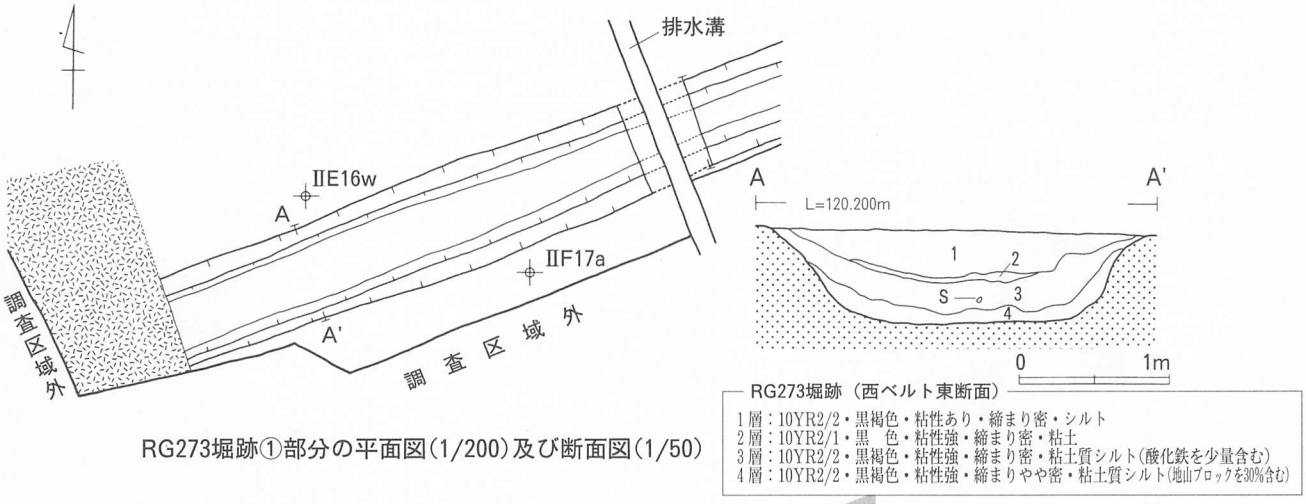
ＲＤ 834 土坑
<位置>ⅡＥ18ｑ区に位置している。
<平面形・規模>平面形は円形をしており、規模は 82 × 79.5 ㎝、深さ 34 ㎝である。
<埋土>暗褐色土の単層からなり、堅く締まっている。
<出土遺物>出土遺物はない。
<時期>時期は不明である。

4．堀　　跡

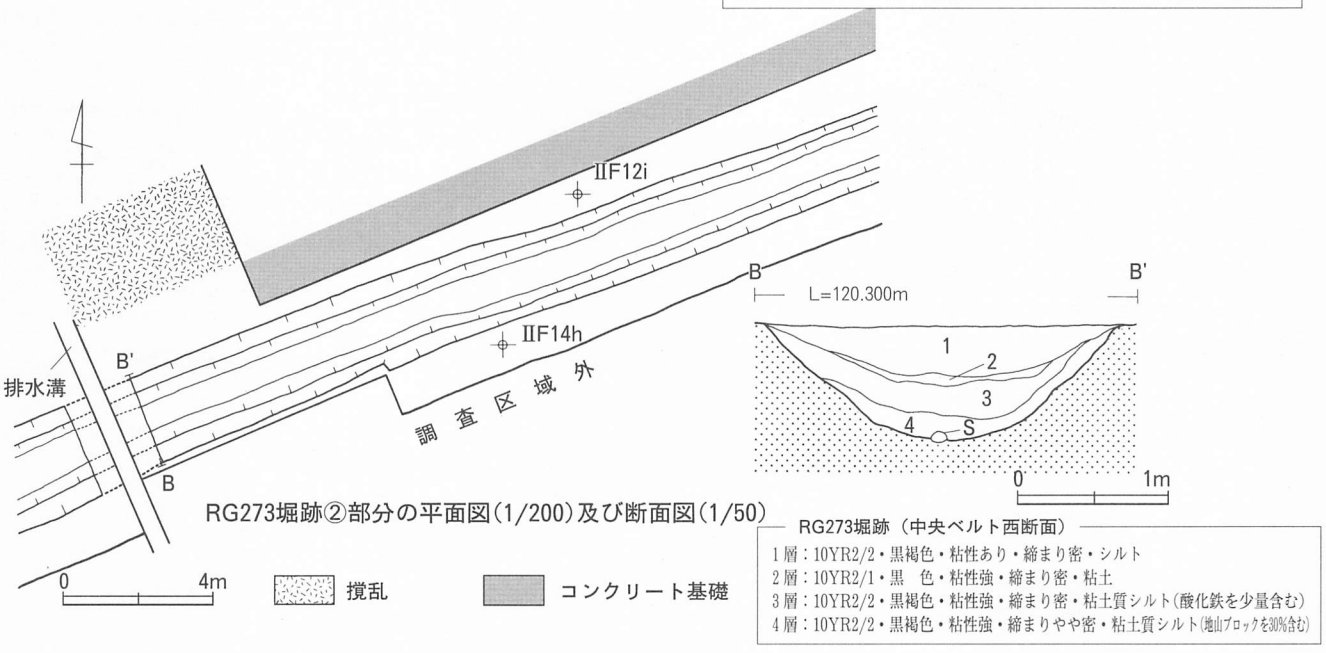
ＲＧ 273 堀跡
<位置>調査区のⅡＥ17ｕ～ⅡＦ７ｔ区の区間（南西―北東）はほぼ直線的に伸び、ⅡＦ７ｕ区で南東方向に向きを変え、一部調査区外を通ってⅡＧ17ｄ区まで伸びている。Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりとして検出している。南東部は多くの撹乱を受けており検出には難渋した。
<規模・方向>南西端と南東端は多くの撹乱を受けている上に、調査区外に伸びているため規模の全容は不明であるが、調査区内で今回確認された長さは南西～北東側52.86m、北東端で方向が変わり、北西～南東側 11.22mである。上幅 1.36 ～ 2.91m、下幅 0.49～ 1.42m、深さは 15.5 ～ 77.5㎝で巡っている。方向が換わる地点は上幅 1.41m、下幅 91㎝、深さ 33.5㎝である。南西端の延長は隣接する第 23 次調査区のＲＧ045 につながる可能性が高い。
<埋土>レンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。黒褐色土を中心とした 4 層からなり、堅く締まっている。全体として 2 層以下は粘性の強い粘土もしくは粘土質シルトで構成されている。南西側と北東側では多少の違いが見られ、西ベルト、中央ベルト付近では 3 層に酸化鉄の集積が見られるが、東ベルト付近では確認されない。一方、東ベルト付近では 1 層と 3 層に径約 2 ～10 ㎝程度の小礫が混ざっている。
<壁・床>壁はあまり凹凸もなく、床面に対して 25 ～ 40° の角度で直線的に立ち上がっている。南東方向に向きが変わる付近は部分的に砂礫が多かったため非常に崩れやすい。床面は全体に平坦であるが中央ベルト付近ではＵ字状になっている。今回の調査では堀跡の周囲から橋脚跡等は検出できなかった。
<遺物>13 は土師器の甕の底部である。14 はロクロ使用の土師器の坏の底部であるが、他の土器とは色合いが違って灰白色をしており焼成が異なると思われる。15 は今回の調査で唯一出土した須恵器でロクロ成形された甕の胴部の一部である。16 は土師器の甕の底部であり、内面はハケメ調整されている。外底面には砂と小礫がまんべんなく付着しており砂底土器と思われる。17 はロクロ使用の土師器の坏の底部で、外底面に回転糸切痕が見られる。18 はロクロ使用の土師器の坏の口縁部である。19 は同じく土師器の坏の口縁部であるが、ロクロ使用痕は見られず、内・外面ともヨコナデ調整されている。20 はロクロ不使用の土師器の甕の口縁部であり、内・外面ともヨコナデ調整されている。21 はロクロ不使用の坏の底部で、内面は黒色処理が施され、外面にはハケメ痕が見られる。
<時期>出土した遺物から平安時代と思われる。



調査区内におけるRG273堀跡概要図

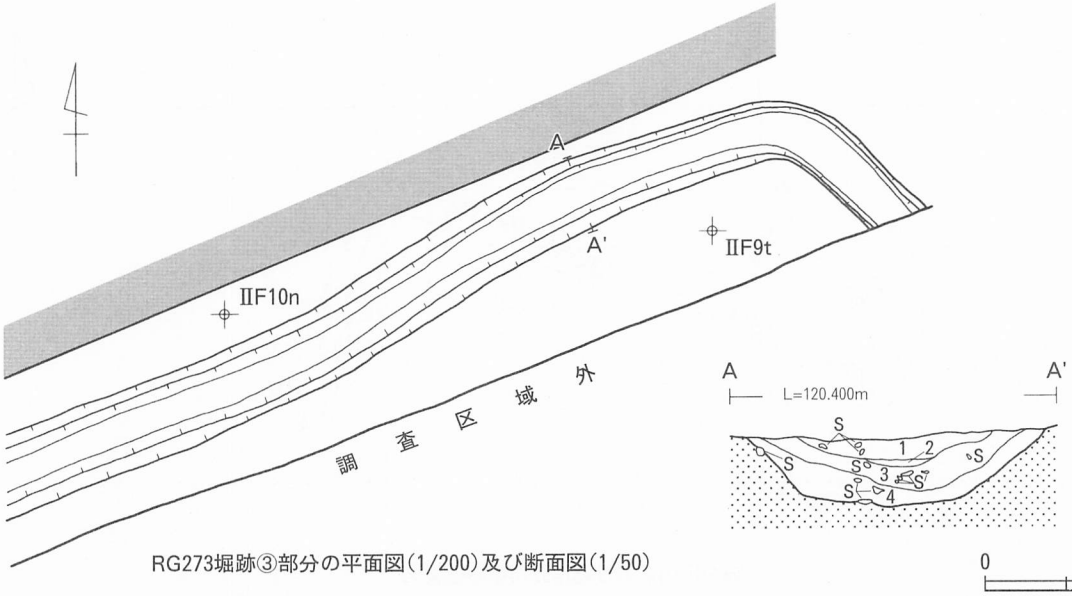


RG273堀跡①部分の平面図(1/200)及び断面図(1/50)



RG273堀跡②部分の平面図(1/200)及び断面図(1/50)

第12図　RD273堀跡（1）

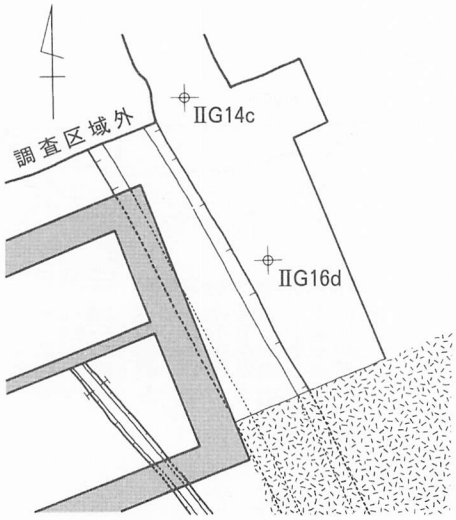


RG273堀跡③部分の平面図(1/200)及び断面図(1/50)

0　1m

RG273堀跡（東ベルト東断面）

1層：10YR2/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト(径2～3㎝の小礫を含む)
2層：10YR2/1・黒　色・粘性強・締まり密・粘土
3層：10YR2/2・黒褐色・粘性強・締まり密・粘土質シルト(径5～10㎝の小礫を含む)
4層：10YR2/2・黒褐色・粘性強・締まりやや密・粘土質シルト
(中央部に径5～10㎝の小礫を含む・下層に酸化鉄が集積している)



RG273堀跡④部分の平面図(1/200)

撹乱　　コンクリート基礎

0　4 m

遺構名	長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)	方　向	遺　物	時期
RG273	52.86	136.0～291.0	49.0～142.0	15.5～77.5	北東－南西	13,14,16,～21土師器 15須恵器	平安
	11.22	182.0～190.0	1.06～1.12	34.0～38.5	北西－南東		
RG265	3.60	44.0～48.0	21.0～31.0	12.0～19.0	北西－南東	なし	不明
RG267	2.97	92.0～97.0	57.0～61.0	6.5～13.5	北西－南東	なし	不明
RG274	3.29	37.0～40.0	28.0～31.0	12.5～15.0	北西－南東	なし	不明
RG275	2.87	38.0～42.5	18.0～27.0	9.0～17.5	北西－南東	なし	不明
RG276	9.07	33.0～48.0	14.0～25.0	11.0～16.0	北西－南東	土師器片	不明
RG277	5.49	40.0～55.0	29.0～32.0	15.5～22.0	西北西－東南東	土師器片	不明
RG278	12.87	39.0～49.0	24.0～30.0	10.0～20.0	北西－南東	なし	不明
RG279	17.98	37.5～63.0	19.0～36.0	4.5～19.5	北東－南西	土師器片	不明
RG280	16.24	38.0～40.0	18.0～37.0	3.0～5.0	北東－南西	土師器片	不明

第4表　堀跡・溝跡一覧

第13図　RD273堀跡（2）

5．溝　　跡

ＲＧ 265 溝跡

＜位置＞ⅡＦ４ｄ区～ⅡＦ５ｅ区～ⅡＦ５ｆ区にわたって位置し、北西側は第23次調査区へ延びている。

＜規模・方向＞北西側と南東側が調査区外へ延びているため規模の全容は不明である。今回確認された規模は、長さ 3.60 m、上幅 44 ～ 48cm、下幅 21～ 31 cm、深さ 12 ～ 19 cmで、北西－南東方向に直線的に延びている。

＜埋土＞黒色土の単層からなり、堅く締まっている。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞時期は不明である。

ＲＧ 267 溝跡

＜位置＞Ⅱ２Ｆ１ｎ区～ⅡＦ２ｎ区～ⅡＦ２ｏ区にわたって位置し、北西側は第 23 次調査区へ延びている。

＜規模・方向＞北西側と南東側が調査区外へ延びているため、規模の全容は不明である。今回確認された規模は、長さ 2.97 m、上幅 92 ～ 97 cm、下幅 57 ～ 61cm、深さ 6.5 ～ 13.5 cmである。ＲＧ 265 溝跡と並行して北西－南東方向に延びている。

＜埋土＞暗褐色土の単層からなり、堅く締まっている。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞時期は不明である。

ＲＧ 274 溝跡

＜位置＞ⅡＥ７ｖ区～ⅡＥ８ｗ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞北西側と南東側が調査区外へ延びているため、規模の全容は不明である。今回確認された規模は、長さ 3.29 m、上幅 37 ～ 40cm、下幅 28 ～ 31cm、深さ 12.5 ～ 15cmである。ＲＧ 265・ＲＧ 267 溝跡と並行して北西－南東方向に延びている。

＜埋土＞黒色土の単層からなり、堅く締まっている。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞時期は不明である。

ＲＧ 275 溝跡

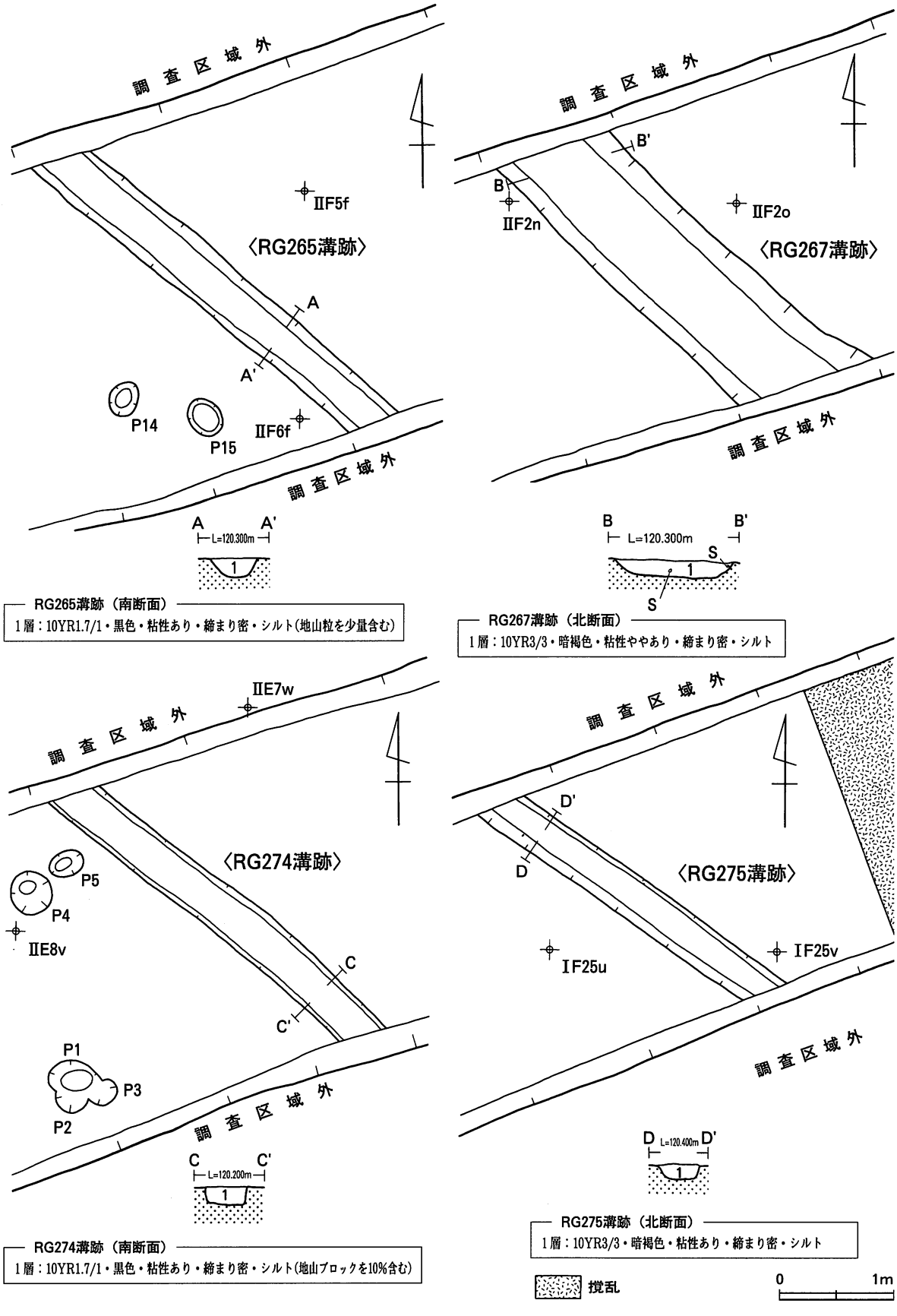
＜位置＞ＩＦ24ｔ区～ＩＦ24ｕ区～ＩＦ25ｖ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞北西側と南東側が調査区外へ延びているため規模の全容は不明である。今回確認された規模は、長さ 2.87 m、上幅 38 ～ 42.5 cm、下幅 18 ～ 27 cm、深さ 9 ～ 17.5 cmである。前述のＲＧ 265・267・274 溝跡と並行して北西－南東方向に延びている。

＜埋土＞暗褐色土の単層からなり、堅く締まっている。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞時期は不明である。



第14図　RG265・267・274・275溝跡

ＲＧ 276 溝跡

＜位置＞ⅡＧ17ａ区～ⅡＧ20ｄ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞北西側はアパートの基礎によって壊され、南東側は調査区外へ延びているため規模の全容は不明である。今回確認された規模は長さ 9.07 m、上幅 33 ～ 48 ㎝、下幅 14 ～ 25㎝、深さ 11 ～ 16㎝で既述の溝跡等と同様に北西－南東方向に延びている。

＜埋土＞黒褐色土の単層からなり、地山粒を少量含んでいる。

＜出土遺物＞摩滅した土師器の小片が出土している。

＜時期＞出土した遺物から時期を推定できないため不明である。

ＲＧ 277 溝跡

＜位置＞ⅡＧ19ａ区～ⅡＧ20ｄ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞北西側はアパートの基礎によって壊されているため規模の全容は不明である。今回確認された規模は長さ 5.49 m、上幅 40 ～ 55 ㎝、下幅 29 ～ 32 ㎝、深さ 15.5 ～ 22 ㎝である。ⅡＧ20ｃ区でＲＧ276 溝跡と合流している。

＜埋土＞黒褐色土の単層からなり、地山粒を少量含んでいる。

＜出土遺物＞摩滅した土師器片が僅かに出土している。

＜時期＞出土した遺物から時期を推定できないため不明である。

ＲＧ 278 溝跡

＜位置＞ⅡＦ17ｖ区～ⅡＧ21ｂ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞　北西側と中央付近はアパートの基礎によって壊され、南東側は調査区外に延びているため規模の全容は不明である。今回確認された規模は、長さ 12.87 m、上幅 39 ～ 49 ㎝、下幅 24 ～ 30㎝、深さ 10 ～ 20 ㎝ で、北西－南東方向に延びている。

＜埋土＞黒褐色土の単層からなり、地山粒を少量含んでいる。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞不明である。

ＲＧ 279 溝跡

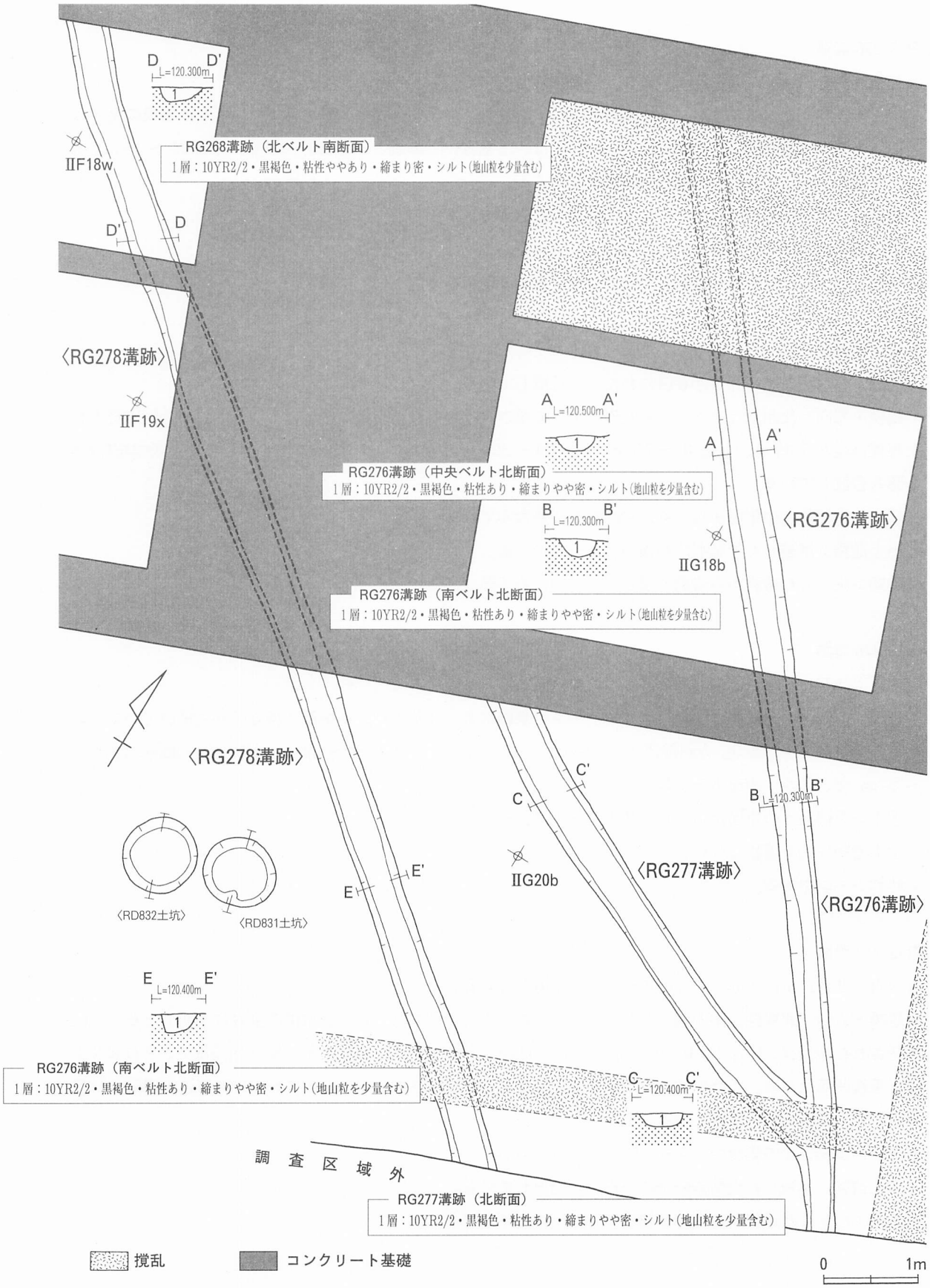
＜位置＞ⅡＦ25ｉ区～ⅡＦ19ｑ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞北東側、南西側ともアパートの基礎によって壊されており、規模の全容は不明である。今回確認された規模は、長さ 17.98 m、上幅 37.5 ～ 63 ㎝、下幅 19 ～ 36 ㎝、深さ 4.5 ～ 19.5㎝で、ＲＤ 833 土坑と重複関係にあり、これに切られていることからＲＧ 279 溝跡の方が古い。これまでに既述の溝跡とは異なり北東－南西方向に延びている。

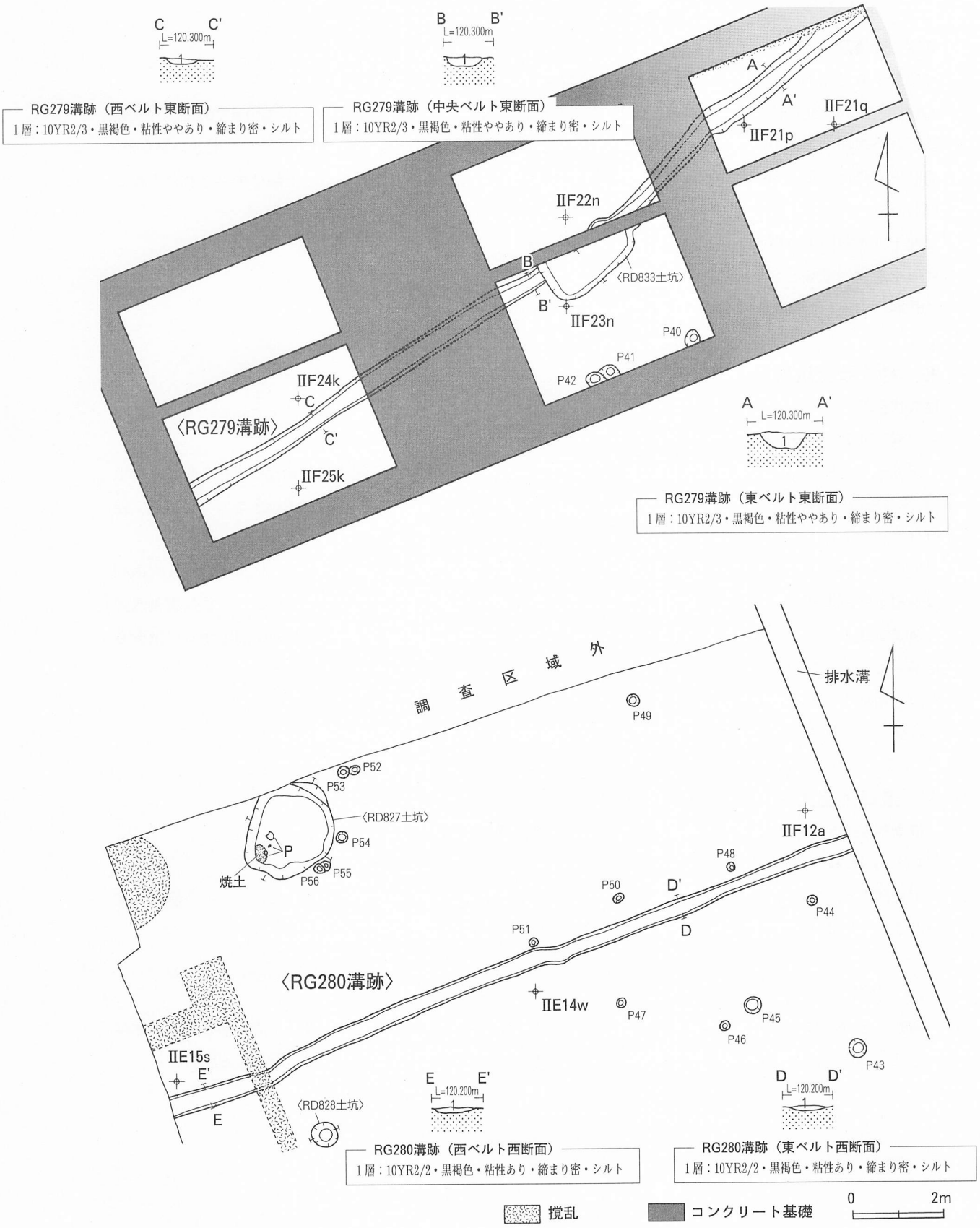
＜埋土＞黒褐色土の単層からなり、堅く締まっている。

＜出土遺物＞摩滅した土師器の小片が僅かに出土している。

＜時期＞出土した遺物から時期を推定できないため不明である。



第15図　RG276・277・278溝跡



第16図　RG279・280溝跡

ＲＧ 280 溝跡

＜位置＞ⅡＥ15ｑ区～ⅡＦ12ａ区にわたって位置している。

＜規模・方向＞北東側は撹乱を受け、南西側は調査区外へ延びているため規模の全容は不明である。今回確認された規模は長さ 16.24 m、上幅 38～40 ㎝、下幅 18～37 ㎝、深さは浅く 3 ～ 5 ㎝である。前述のＲＧ279 溝跡と同様に北東－南西方向に延びている。今回検出された他の溝跡と比較から、上部は削平されたものと思われる。

＜埋土＞黒褐色土の単層からなり、堅く締まっている。

＜出土遺物＞摩滅した土師器の小片が僅かに出土している。

＜時期＞出土した遺物から時期を推定できないため不明である。

6．柱穴状土坑群

柱穴状土坑

＜位置＞ⅡＦ24ｒ区～ⅡＦ21ｖ区にわたって位置している。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形が 32 基、円形が 29 基、不整形 1 基で、規模は長軸径が 22.5 ～ 49㎝（平均 33.3 ㎝）、短軸径が 16 ～ 42.5 ㎝（平均 28.1 ㎝）、深さは 6.5 ～ 41.5 ㎝（平均 20.6 ㎝）となっている。柱痕は確認できなかった。

＜形態＞当初はＰ20、Ｐ25 ～ 28、Ｐ30 ～ 33 によって建物跡を構成するかと思われたが、柱穴と柱穴の間隔や規模が不規則であること、本来存在すると思われる場所で柱穴を検出できなかったこと、更に調査区外へ遺構が続くと思われ全容が明らかにできないことから、今回の調査では建物跡、柵列を推定するには至らなかった。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞どの柱穴状土坑からも時期を推定できる遺物が出ていないため不明である。

7．遺構外出土遺物

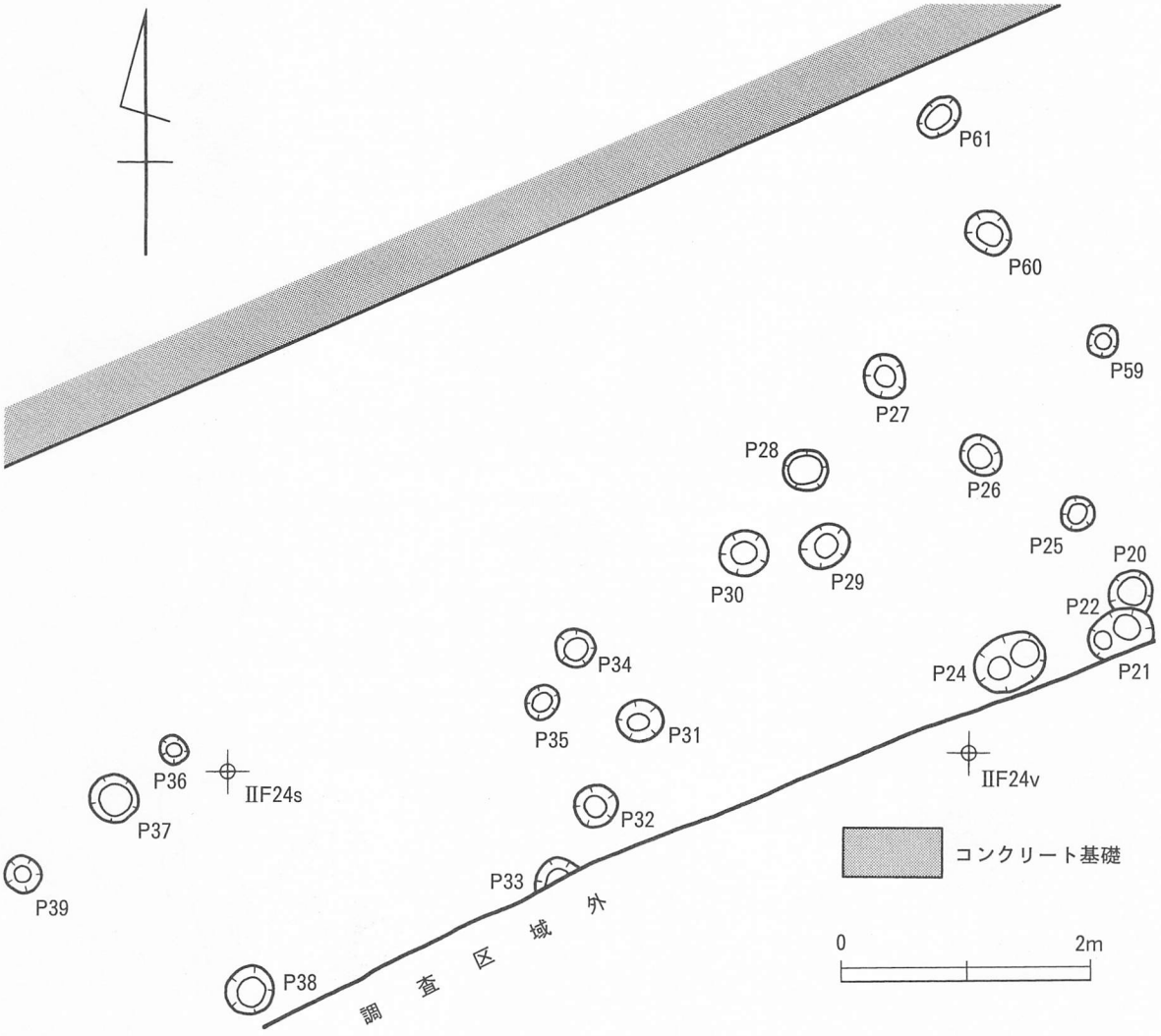
遺構外から出土した遺物は土師器片 1 点と銭貨 1 枚と極めて少ない。

(1) 土師器片

調査区東側のⅣ層下面から、土師器の坏の体部下半～底部にかけての破片が出土した。ロクロを使用して成形されているが、底面に回転糸切り痕は見られない。内面には黒色処理が施されている。

(2) 銭貨

調査区北側の排水溝脇の埋土中から「寛永通宝」1 枚が出土した。銅銭の一文銭で「寶」字の貝画末尾が「ハ」（ハ貝寶）になっており、更に背面に「文」字等のない無背銭であるところから新寛永と思われる。



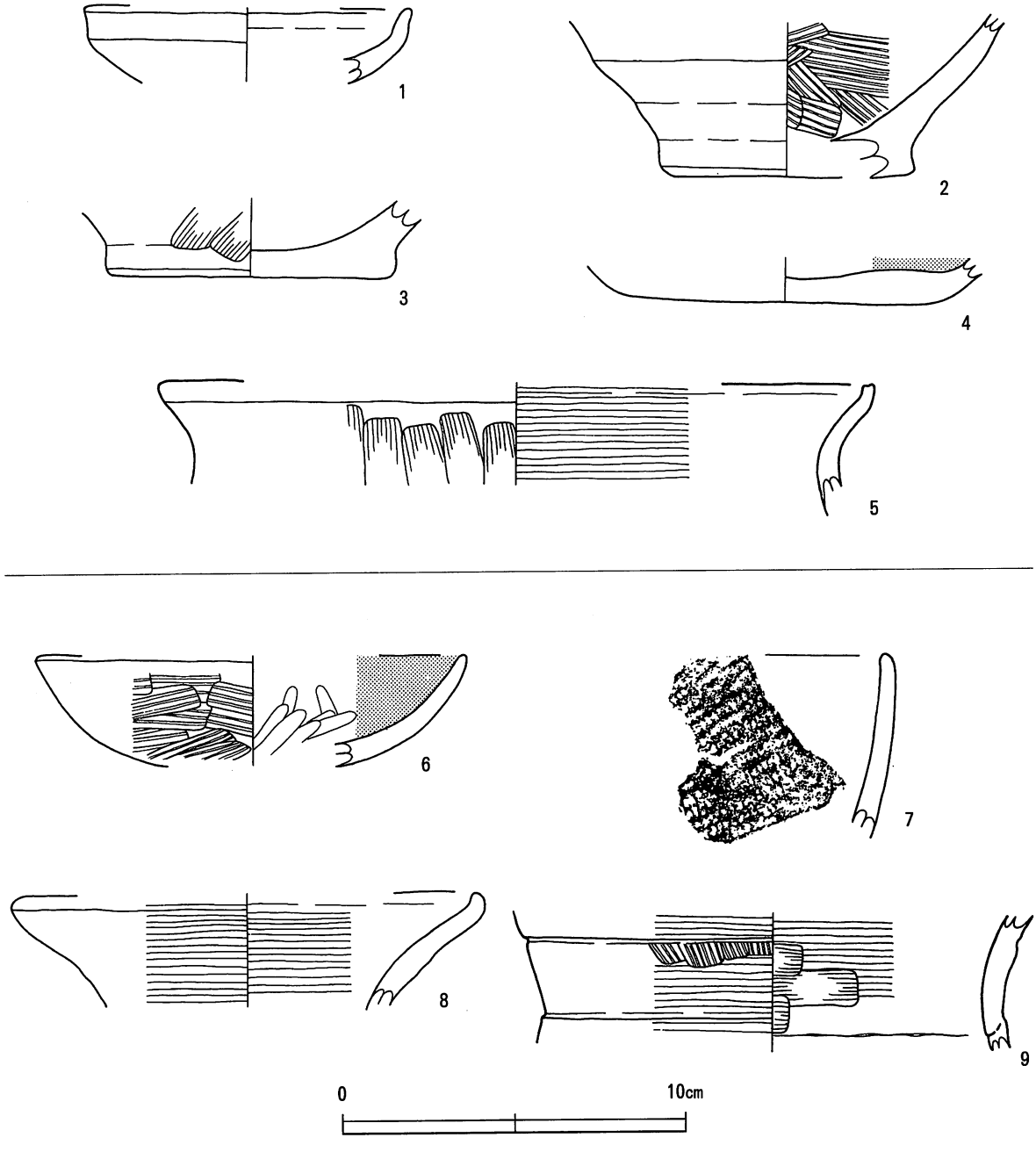
第17図　柱穴状土坑群

第５表　柱穴状土坑一覧

柱穴No.	開口部cm	深さcm	形　状
1	47.0×29.5	33.5	楕円形
2	28.0×22.5	9.0	楕円形
3	26.0×24.5	9.5	円　形
4	36.5×34.5	24.0	楕円形
5	29.5×20.0	22.0	楕円形
6	36.5×33.5	15.0	円　形
7	33.0×17.0	32.5	楕円形
8	24.5×23.5	13.0	円　形
9	30.0×27.5	13.5	円　形
10	27.5×24.0	17.0	円　形
11	27.0×24.0	27.5	円　形
12	38.5×24.5	24.0	楕円形
13	39.0×37.0	41.5	円　形
14	30.0×24.5	14.0	楕円形
15	35.5×25.0	11.0	楕円形
16	41.5×30.5	35.0	楕円形
17	40.5×28.0	34.5	楕円形
18	47.0×35.0	33.5	楕円形
19	35.0×35.0	12.0	円　形
20	37.5×35.0	22.5	円　形
21	38.0×38.0	25.5	円　形

柱穴No.	開口部cm	深さcm	形　状
22	30.5×29.5	25.5	円　形
23	45.0×40.0	26.5	円　形
24	42.0×38.0	20.5	円　形
25	29.5×28.5	12.5	円　形
26	37.5×30.0	13.5	楕円形
27	41.5×30.5	18.5	楕円形
28	37.0×31.5	20.0	楕円形
29	42.5×35.0	23.5	楕円形
30	41.5×34.0	40.5	楕円形
31	40.0×31.5	47.0	楕円形
32	34.5×32.5	23.5	円　形
33	36.5×27.5	8.5	楕円形
34	33.0×32.5	14.5	円　形
35	30.0×25.5	25.0	楕円形
36	22.5×21.5	20.5	円　形
37	39.0×39.0	23.0	円　形
38	39.0×38.0	32.0	円　形
39	28.5×28.5	31.0	円　形
40	39.0×30.5	31.0	楕円形
41	34.0×32.5	36.5	円　形
42	49.0×34.0	36.5	楕円形

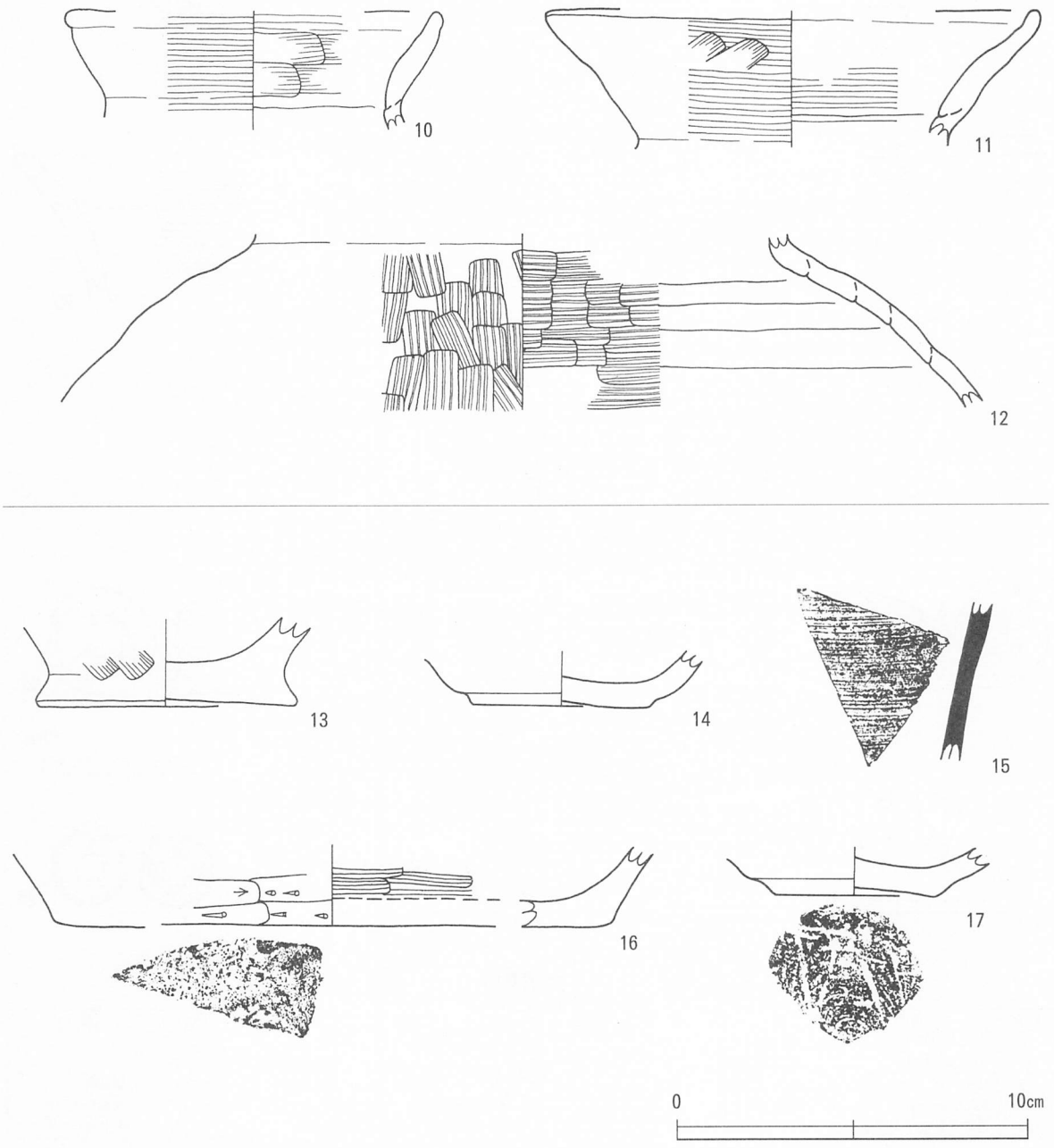
柱穴No.	開口部cm	深さcm	形　状
43	43.0×42.5	19.5	円　形
44	24.0×21.0	10.5	楕円形
45	37.5×35.5	19.0	円　形
46	24.5×22.5	19.0	円　形
47	22.5×18.0	11.5	楕円形
48	22.0×19.5	27.0	円　形
49	27.5×26.0	12.0	円　形
50	26.5×17.5	11.0	楕円形
51	23.5×16.0	7.5	楕円形
52	23.0×18.5	6.5	楕円形
53	26.5×25.0	12.0	円　形
54	30.0×24.0	7.5	楕円形
55	23.5×21.0	9.0	不整形
56	22.5×21.5	11.0	楕円形
57	30.0×28.0	11.0	円　形
58	30.0×23.5	20.0	楕円形
59	23.5×20.0	12.5	楕円形
60	35.5×30.0	20.0	円　形
61	35.5×26.5	11.0	楕円形
62	31.0×24.0	18.0	楕円形



第6表　土器観察表（1）

図No.	出土地点	種類	器種	部位	外面調整	内面調整	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備　考
1	RA301北西埋土	土師器	坏	口縁～体部			(9.6)		(2.2)	
2	RA301北西埋土	土師器	甕	底部		ハケメ		(7.5)	(4.6)	
3	RA301北西埋土	土師器	甕	底部	ナデ			(8.4)	(2.3)	
4	RA301北西埋土	土師器	坏	底部					(1.3)	内面黒色処理
5	RA310北西埋土	土師器	甕	口縁部	ナデ	ヨコナデ	(21.0)		(3.0)	
6	RD827埋土上位	土師器	坏	体部	ハケメ	ミガキ	(12.6)		(3.2)	内面黒色処理
7	RD827埋土上位	縄文土器	深鉢	体部						
8	RD827埋土中位	土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.0)		(4.5)	
9	RD827埋土中位	土師器	甕	頸部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ			(4.1)	

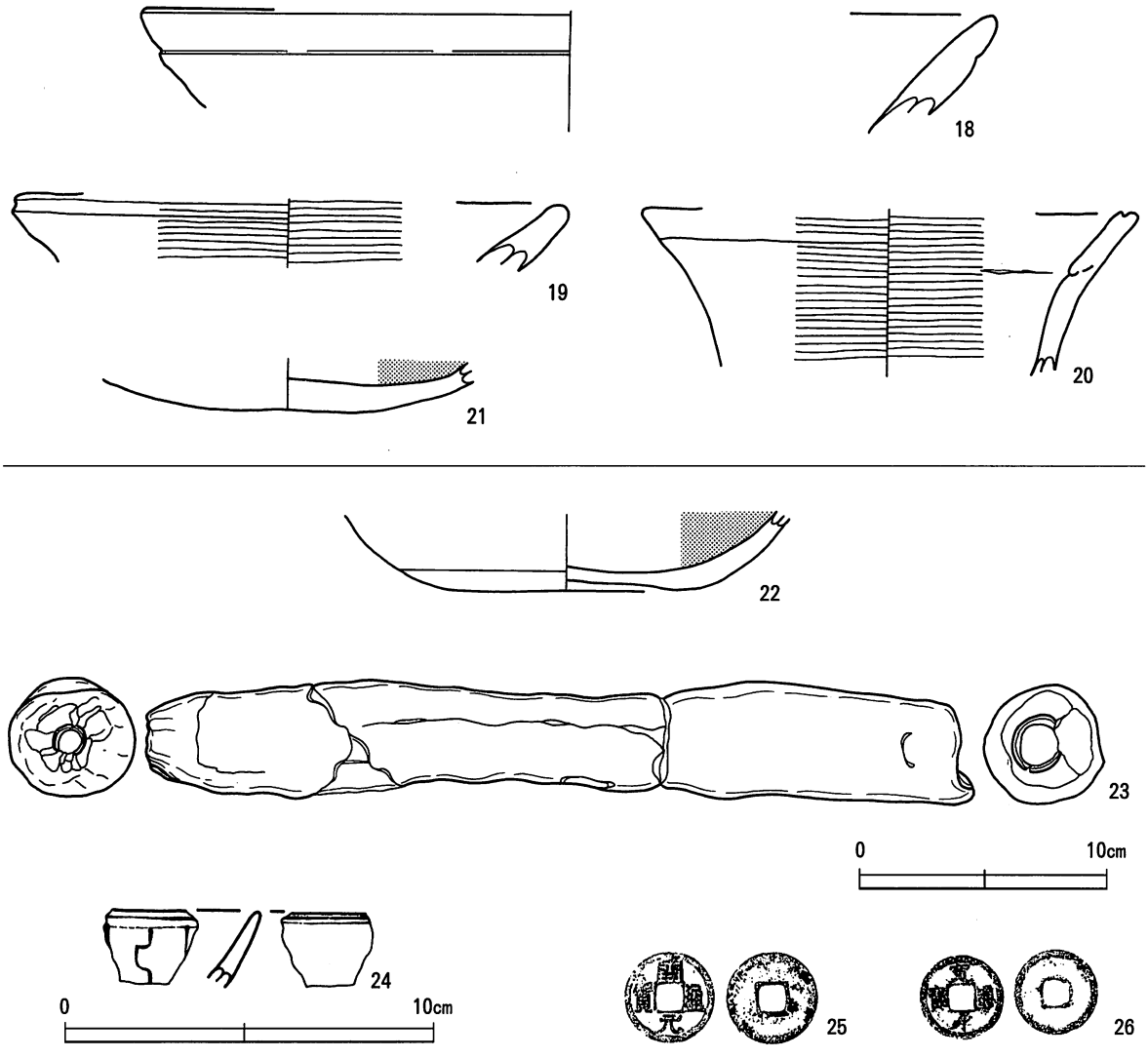
第18図　遺構内出土遺物（1）



第７表　土器観察表（2）

図No.	出土地点	種類	器種	部位	外面調整	内面調整	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備　考
10	RD827埋土	土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ナデ	(10.8)		(3.4)	
11	RD827埋土	土師器	甕	口縁部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	(14.2)		(3.9)	輪積痕
12	RD827埋土	土師器	球胴甕	体部	ハケメ	ハケメ			(5.0)	内面に輪積痕
13	RG273中央埋土中位	土師器	甕	底部	ナデ			7.6	(2.5)	
14	RG273中央埋土中位	土師器	坏	底部	ロクロ			(5.2)	(1.6)	
15	RG273中央埋土中位	須恵器	甕	体部	ロクロ	ロクロ				
16	RG273中央埋土	土師器	甕	底部	ケズリ	ハケメ		(16.0)	(2.3)	砂底
17	RG273中央埋土	土師器	坏	底部	ロクロ	ロクロ		(4.6)	(1.4)	底面回転糸切痕

第19図　遺構内出土遺物（2）



第８表　土器観察表（3）

図No.	出土地点	種類	器種	部位	外面調整	内面調整	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備　考
18	RG273西側埋土	土師器	坏	口縁部	ロクロ	ロクロ	(23.0)		(3.2)	
19	RG273西側埋土	土師器	坏	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	(14.8)		(1.8)	
20	RG273南側埋土	土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	(13.2)		(4.4)	輪積痕
21	RG273南側埋土	土師器	坏	底部	ハケメ	ミガキ			(1.4)	内面黒色処理
22	調査区北側中央埋土	土師器	坏	底部	ロクロ	ロクロ		(6.2)	(2.0)	内面黒色処理

第９表　土製品観察表

図No.	出土地点	層位	器種	残存部外径cm	残存長cm	最大内径cm	最小内径cm	外面調整	内面調整	残存部	備　考
23	RA301竪穴住居跡	中位	羽口	3.62～5.24	33.3	1.62	1.37	ナデ	細い管への巻き付け	ほぼ全部	被熱の痕がみられないため、羽口でない可能性も考えられる

第10表　陶磁器観察表

図No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	産地	年代	備　考
24	染め付け					肥前	19C？	

第11表　金属製品観察表

図No.	出土地点	種別	名称	直径（cm）	重量（g）	備　考
25	RD832床面	銭貨	開元通宝	2.4	1.80	
26	2E7x区埋土	銭貨	寛永通宝	2.3	1.62	新寛永と思われる（ハ貝寶）

第20図　遺構内出土遺物（3）・遺構外出土遺物

Ⅴ まとめ

ここでは、本次調査で検出された遺構と遺物について整理し、まとめとする。

1．遺構

(1) 竪穴住居跡

今回の調査では奈良時代の竪穴住居跡が1棟検出されているが、カマド及び煙道部が調査区外にあると思われるため、全容は不明である。

＜占地＞調査区北側に位置しシルト土中に床面があるが、砂礫層まで掘り込まれてはいない。

＜平面形・規模＞確認された範囲の平面形は隅丸方形をしており、規模は3.71×1.85m（上端で計測）である。

＜床＞床面から柱穴は確認されていない。確認された範囲は平坦で南側が若干高くなっている。

＜壁＞床面から外傾気味に立ち上がっており、壁高は南壁37㎝、西壁38㎝、東壁36.5㎝である。

＜柱穴＞床面で柱穴を確認することはできなかったが、西壁外に4基、東壁外に2基検出された。これらの径は22～38㎝、深さは6～20㎝、平面形はほとんどが円形である。どの柱穴にも柱痕は認められなかった。

＜カマド＞調査区外に存在すると思われるため、全容は不明であるが、調査区域外をはさんで北側に隣接する第23次調査区で確認された煙出し部から推察すると北壁中央付近に位置していると思われる。煙出し部の規模は50×30㎝、深さ38.5㎝で平面形は隅丸方形をしている。煙道部の造りについては不明であるが、床面と煙出し部の標高差から緩やかな登り勾配で煙出し部に続いているものと思われる。

＜埋土＞人為堆積の様子は見られず、自然堆積の様相を示している。

(2) 土坑

土坑は全部で10基（縄文時代1基、奈良時代1基、中世2基、時期不明6基）確認されている。平面形は溝状の長楕円、円形、楕円形、不整形である。縄文時代のＲＤ825はその形状から陥し穴と考えられるが、深さが45～46㎝と比較的浅いため上部が削平されたものと思われる。床面に逆茂木痕は見られない。奈良時代のＲＤ827からはロクロ不使用の土師器の坏、甕が出土している。中世と思われるＲＤ832は底部から「開元通寶」1枚が出土しており、墓壙と考えられる。また、東側に近接するＲＤ831も形状、規模がＲＤ832に酷似することから同じく墓壙と思われる。

(3) 堀跡

ＲＧ273堀跡は南西端と南東端が調査区外へ延びているために全容は不明である。今回調査区内で確認された長さは南西―北東方向に52.82m、北東端で方向を南東方向に変え、北西―南東方向に11.22mである。規模は上幅1.36～2.91m、下幅49㎝～1.42m、深さ15.5～77.5㎝である。橋脚等堀跡に関連すると思われる遺構は検出されていない。出土遺物にはロクロを使用して成形した土師器片、須恵器片も見られるようになることから平安時代のものと考えられる。南西端は隣接する台太郎23次調査区のＲＧ045につながると思われることから、今後隣接する地区の調査が進むことによって全容がより明確になるものと思われる。

(4) 溝跡

溝跡は合計9条検出されているが、遺物が出土していないため時期を推定できるものはない。規模は上幅33～97㎝、下幅14～61㎝、深さ3～20㎝である。方向はＲＧ265・267・274・275・276・277・278が北西―南東方向、ＲＧ279・280が南西―北東方向である。このうちＲＧ265・267は隣接する第23次調査区に延びている。ＲＧ279はＲＤ833と重複関係にあるが、ＲＤ833がＲＧ279を切っていることからＲＤ833の方が新しい。いずれの溝跡も調査区外に延びていたり、撹乱を受けているため全容は不明である。

(5) 柱穴状土坑

調査区南側を中心に合計62基検出されている。規模は長軸径22.5～49㎝、短軸径16～42.5㎝、深さ6.5～41.5㎝で、平面形は円形、楕円形、不整形である。調査区際に多く検出され、全容が明らかでないため建物跡や柵列等の規則性を推定することはできなかった。また、出土遺物もないため時期も不明である。

2．遺物

本次調査で出土した遺物は土器、土製品、陶磁器、金属製品であるが、その大部分が奈良時代と平安時代に属する遺構から出土した土師器である。ここでは遺物の主体となる土師器の坏・甕を中心に特徴を述べることとする。

（奈良時代）

甕、球胴甕とも成形の際にロクロを使用していないものばかりである。器面調整は外面・内面ともナデ・ヨコナデ調整が多く、一部にハケメ調整が見られる。また、割れ口に輪積み痕が見られるものもある。球胴甕は外面・内面ともハケメ調整され、内面には輪積み痕が確認できる。

坏も成形の際にロクロを使用していないものばかりで、丸底と平底がある。ハケメやミガキによる器面調整を施しているもの、内面に黒色処理が施されているものがある。

（平安時代）

甕にはロクロの使用痕が認められるものはなく、ヨコナデやナデ、ハケメといった器面調整が見られる。更に、割れ口に輪積み痕が確認できるものや外底面に砂粒が付着した砂底土器と思われるものもある。

坏は成形の際にロクロを使用したものと、使用していないものとに分けられる。ロクロを使用していないものはヨコナデによる器面調整が施され、輪積み痕が確認できるものもある。底部の切り離しの際に回転糸切りを使用した土器は1点のみで、ロクロ使用の有無に関わらず内面に黒色処理を施したものがある。

（その他）

土製品としてフイゴの羽口と思われるものが出土しているが、非常にもろく、太い亀裂が縦方向に幾筋にも見られることから、焼成されたものではないと思われる。相当の高温下で使用された痕跡が見られないとの自然科学的調査の結果から何か別の用途に用いられた可能性も考えられる。

金属製品として「開元通宝」と「寛永通宝」が1枚ずつ出土している。開元通宝は大きさもまちまちで、書体の変化や背面の地名などが複雑な上、中国の私鋳銭や本邦模造銭が多く、時期や鋳造地を明らかにすることはできなかった。本銭は金でメッキされてはいないが、メッキされたものが墓壙から出土する例が多いことから本銭が出土した土坑も中世の墓壙と思われる。寛永通宝も鋳造地や時期を明らかにすることはでき

なかったが、「寶」の貝画末尾が「ハ」（ハ貝寶）になっていることから新寛永（3期　1697～1747、1767～1781）と思われる。

3．おわりに

本次調査によって台太郎遺跡は、縄文時代には狩猟域として、奈良・平安時代には住居域としての性格を持つ遺跡であることが明らかとなった。本次調査区の現況は昭和39年頃に建設された警察官待機宿舎跡地であるが、それ以前にも畜産試験場の施設が建設され利用されていた。そして、これらの建設工事の際にかなりの遺構・遺物が破壊され、消失した可能性が高い。今回の調査では遺構・遺物とも少量であったため、充分な資料を得ることはできなかったが、これまでに終了した数次にわたる台太郎遺跡の調査結果や今後調査が予定されている周辺遺跡からの資料との比較・検討によって台太郎遺跡全体の起源、集落構造とその変遷等がより明確になるものと思われる。また、志波城跡との関連性についても大きな課題であるが、今後の調査・研究に期待したい。

＜参考・引用文献＞

(1) 1974年 「図録　日本の貨幣1　原始・古代・中世」 東洋経済新報社
(2) 1982年 岩手県立博物館 「岩手の土器」
(3) 1996年 「日本出土銭総覧（1996年版）」兵庫県埋蔵銭調査会
(4) 1995年 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書」文振報第226集
(5) 1996年 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「小幅遺跡第4次発掘調査報告書」文振報第265集
(6) 1998年 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「庫理遺跡発掘調査報告書」文振報第302集
(7) 1999年 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「台太郎遺跡第15次発掘調査報告書」文振報第309集
(8) 1999年 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「熊堂B遺跡5次・台太郎遺跡第16次発掘調査報告書」文振報第293集

Ⅵ. 分析・鑑定結果

台太郎遺跡第22次調査出土『羽口』の自然科学的調査結果

岩手県立博物館　　赤　沼　英　男
咲　山　まどか

台太郎(22次調査)遺跡出土羽口の自然科学的調査結果

岩手県盛岡市向中野地区に立地する台太郎遺跡(22次調査)では1999年に行われた県警察本部待機宿舎建設に伴う緊急発掘調査によって、1号竪穴住居跡の壁面から羽口が出土した[1)]。以下ではそれらの自然科学的調査結果について報告する。

1　調査資料

自然科学的調査を行った資料は、1号竪穴住居跡南側壁面から出土した羽口である（表1）。中空で内径は1.2cm、外径は4cm、横断面は最大5mm厚、最小2mm厚の細い管に、黄褐色を呈する粘土状物質が1～2cm厚で巻き付いた様子を示している。内部の細い管は、その内面から2mm厚部分が灰褐色を、そのまわりは茶褐色を呈している。被熱のあとはみられない。非常にもろく、太い亀裂が縦方向に幾筋もみられるという事実をふまえると、焼成された資料とみることはできない。資料そのものの表面に凹凸があり、中空部分は中心からずれた位置にある。

自然科学的調査は、図1に示す位置から、ダイヤモンドカッターを用いて摘出した試料片を使って実施した。

2　調査方法

摘出した試料片は2分し一方は組織観察に、もう一方は茶褐色部分と黄褐色部分を分別し、それぞれをメノー乳鉢を使って粉砕した後、化学成分分析に供した。また、化学成分分析用試料片のうち黄褐色部分の粉末試料を使って、示差熱・熱重量同時分析を行った。化学成分分析は表2に示す13成分について誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP－AES法）により実施した。

3　調査結果ならびに考察

3－1　摘出した試料片の組織観察結果

図1は羽口の組織観察結果である。摘出した試料片は、ところどころに暗灰色の結晶Qと結晶Opxが残存し、基質が泥質化した組織（領域A）に、緻密で約0.6mm厚の層（領域B）が付着している。後者の層が、肉眼観察によって認められた茶褐色層の一部である（図1ｂ）。マクロ組織の枠で囲んだ内部のEPMAによる分析によって、結晶Qは石英、結晶Opxは単斜輝石と推定され、基質はAl_2O_3、SiO_2を主成分とし少量の酸化鉄を含む泥質であることがわかった（図1ｃ）。また、茶褐色層には酸化鉄が混在していることが確かめられた（図1ｄ）。図1ｅの示差熱・熱重量同時分析には、1061℃近辺にブロードな吸熱のピークが、1589℃近辺には鋭い吸熱のピークがみられる。この資料の溶融開始温度は1000℃以上にあったものと推定される。

3－2　摘出した試料片の化学組成

表2に羽口の化学成分分析結果を示す。羽口黄褐色部のT.Feは10.1％、Si、Alはそれぞれ22.1％、8.29％にある。これに対し茶褐色部のT.Feは20.0％と前者の倍近い含有量をとる。茶褐色部に酸化鉄が含有されているとした組織観察結果とよく整合する。黄褐色部は茶褐色に比べSi、Alがやや低いレベルにある。

3－3　自然科学的調査結果から推定される羽口の製法

自然科学的調査の結果、羽口は相当量の酸化鉄を含む粘土状物質に砂を混ぜたもの、あるいは粘土状物質に砂と酸化鉄を混ぜたものを素材として[2)]、まず肉厚5㎜程度の中空管を造り、それに別途粘土状物質を重ね合わせ全体として肉厚が1.5～2.8㎝になるように成形したものと推定される。

資料には相当の高温にさらされたことを示す痕跡はなく、反応サイト付近で使用されたものとみることはできない。中空内面部分が灰褐色を呈していることから、還元性の気体が通過した可能性が考えられるが、その使用状況を特定することは困難である。既述の通り、土中に資料の一部が埋納されていることをふまえると、そこに使用状況を推定できる情報が隠されている可能性がある。その部分の発掘調査結果を総合しながら使用形態については判断すべき課題と考える。

註

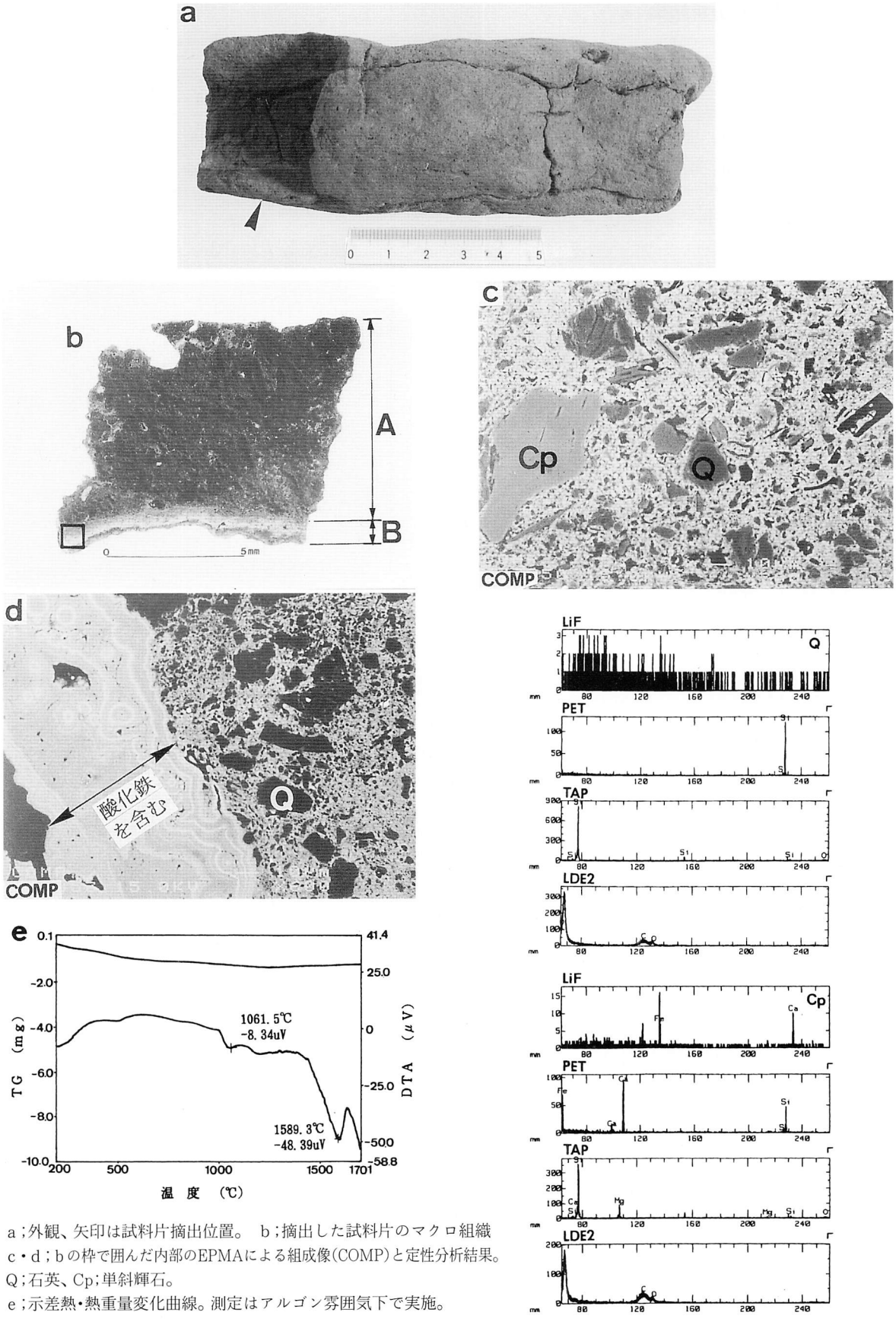
1）　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター菅原靖男氏からのご教授による。なお、資料名は同氏に従った。資料は一部が地表面に露出しており、地中に埋まっている部分も残されていたという。ある程度の長さを有する資料であったと判断される。

2）　岩手大学教育学部土屋信高博士によって別途行われた岩石・鉱物学的研究によると、黄褐色部は粘土に極少量の安山岩～デイサイト質火山灰起源の砂を混ぜたたものと推定されている。

表１　羽口の成分分析結果

資料名	化学成分（mass%）													igloss
	T.Fe	Cu	Mn	P	Mi	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	K	
茶褐色部	10.1	<0.001	0.028	0.074	0.003	0.003	0.288	22.1	0.615	8.29	0.801	0.015	1.03	16.2
黄褐色部	20.1	<0.001	0.052	0.057	0.003	0.003	0.247	19.1	0.468	6.36	0.656	0.012	0.77	16.5

注）化学成分分析は ICP-AES 法による。



a；外観、矢印は試料片摘出位置。 b；摘出した試料片のマクロ組織
c・d；bの枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。
Q；石英、Cp；単斜輝石。
e；示差熱・熱重量変化曲線。測定はアルゴン雰囲気下で実施。

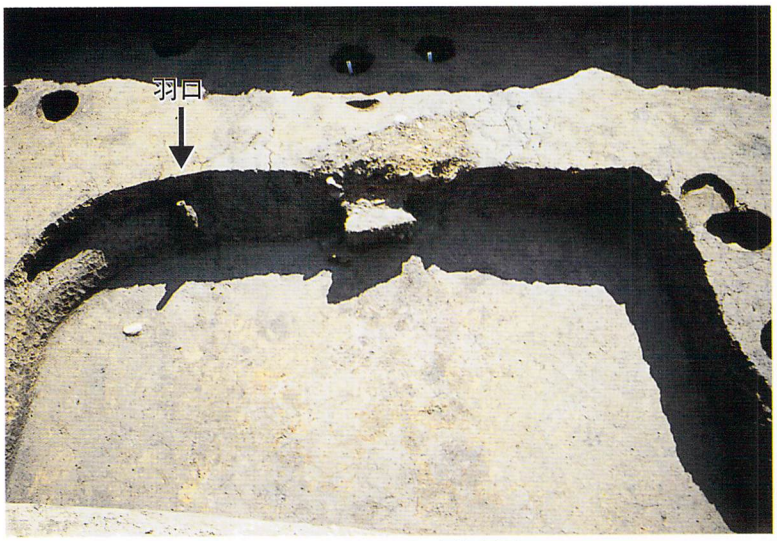
図1　羽口の外観と組織観察結果ならびに示差熱・熱重量変化曲線

写　真　図　版

遺跡遠景（南から）

遺跡近景（南から）

写真図版１　遺跡全景



RA301 竪穴住居跡

羽口出土状況（RA301 南壁面より）

RG237 堀跡（東側および東端部）

RG273 堀跡（西側）

遺構検出作業風景

遺構精査風景

写真図版 2　検出遺構及び作業風景

台太郎遺跡（22次）と
周辺の様子
（平成11年10月現在）

昭和36年頃の
台太郎遺跡周辺の様子
（点線内が22次調査区と思われる）

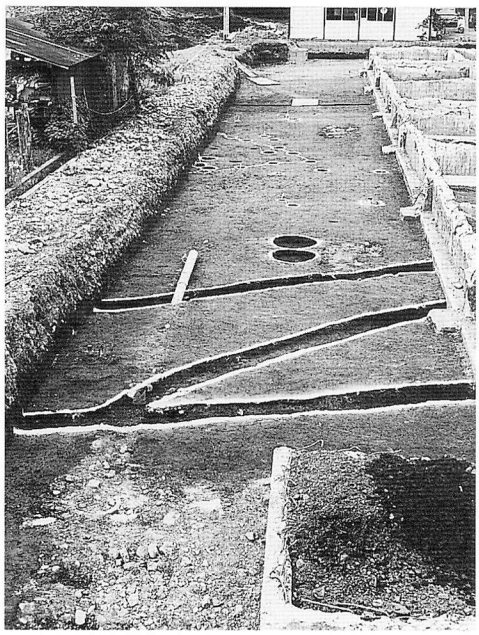
写真図版３　遺跡周辺の様子

調査区現況（北西から）

基 本 層 序

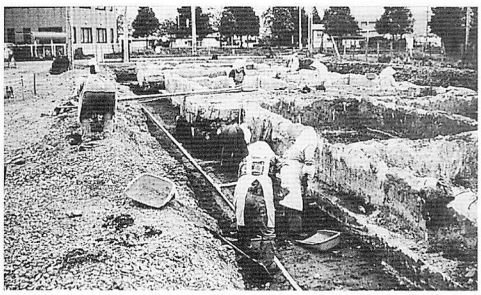
写真図版４　調査区現況・基本層序

調査区北側および中央部全景（北西から）



調査区南側全景（東から）

試掘作業風景

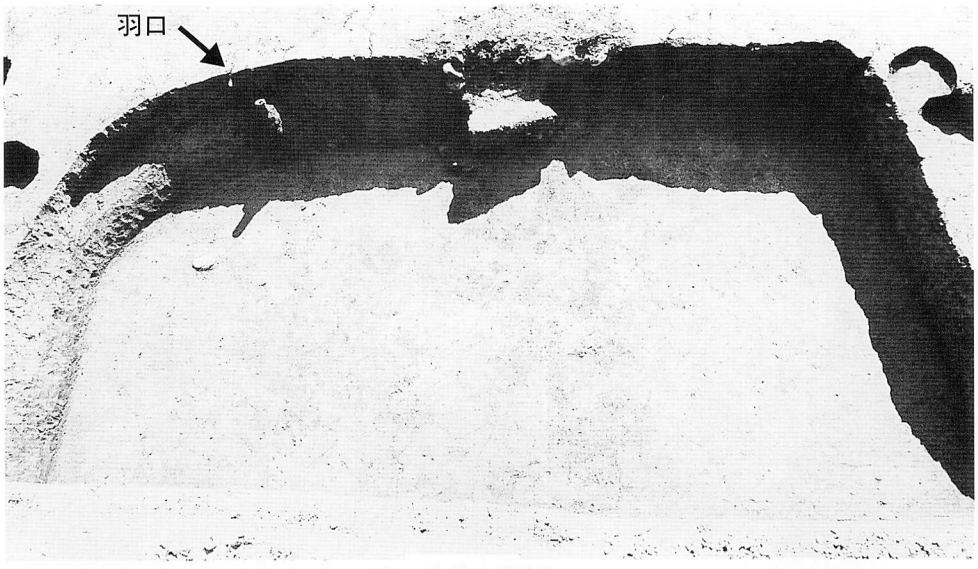


コンクリートの基礎を残しながらの遺構検出作業風景

遺構（溝跡）精査風景

遺構（土坑）精査風景

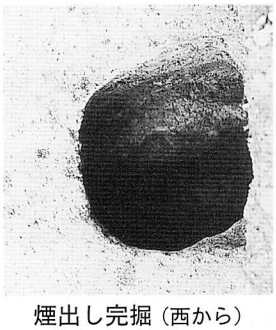
写真図版５　調査区全景（完掘）・作業風景



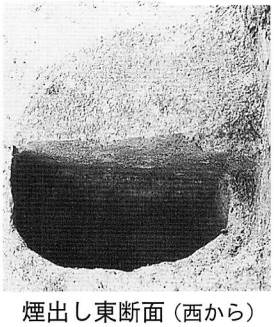
RA301竪穴住居跡完掘（北から）

RA301竪穴住居跡北断面（南から）

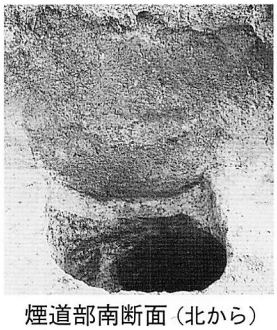
RA301竪穴住居跡東断面（西から）



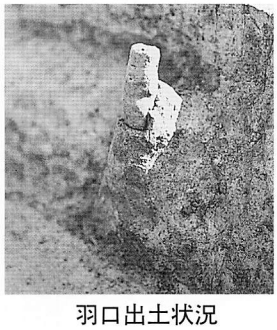
煙出し完掘（西から）



煙出し東断面（西から）

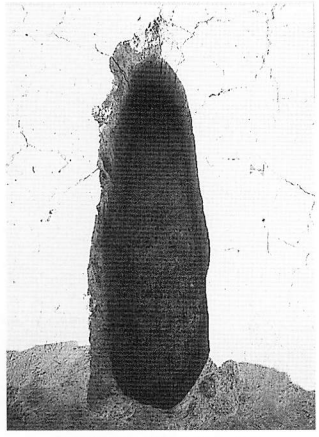


煙道部南断面（北から）

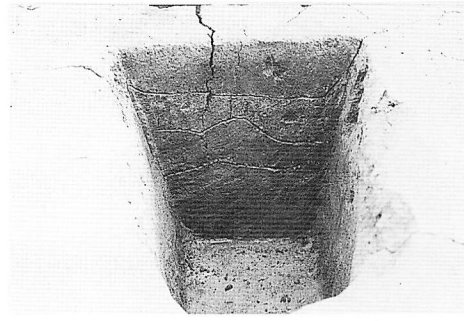


羽口出土状況

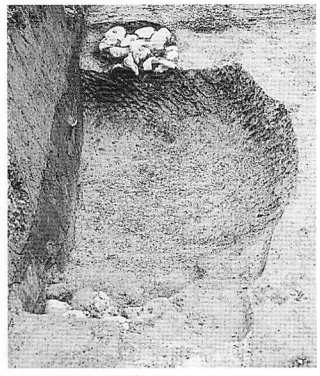
写真図版 6　RA301竪穴住居跡



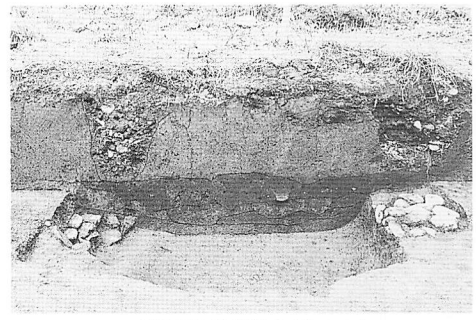
RD825完掘（南から）



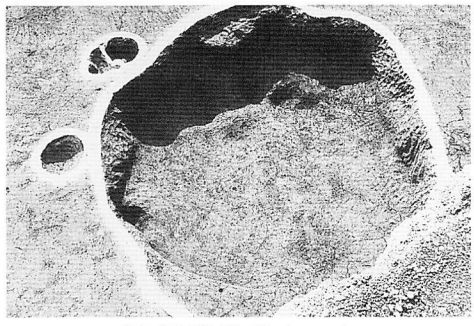
RD825南断面（北から）



RD826完掘（西から）

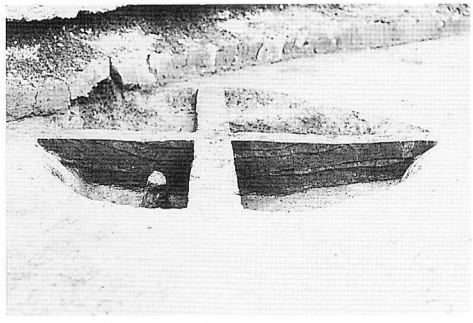


RD826北断面（南から）

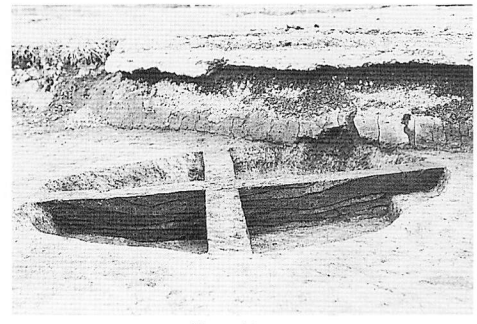


RD827完掘（北東から）

RD827遺物出土状況（東から）

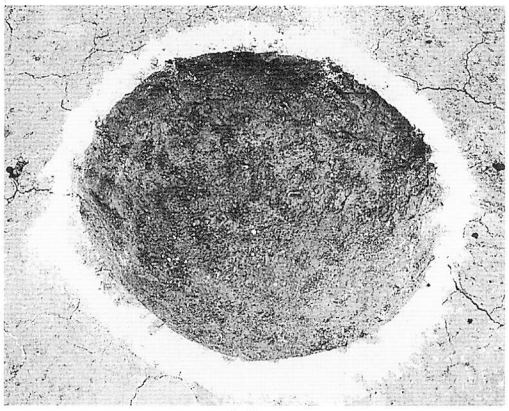


RD827北東断面（南西から）

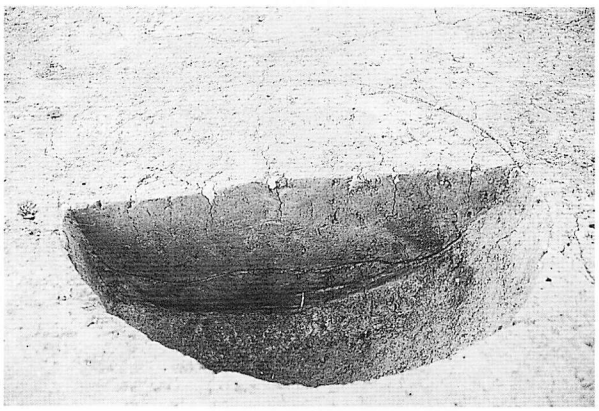


RD827北西断面（北南から）

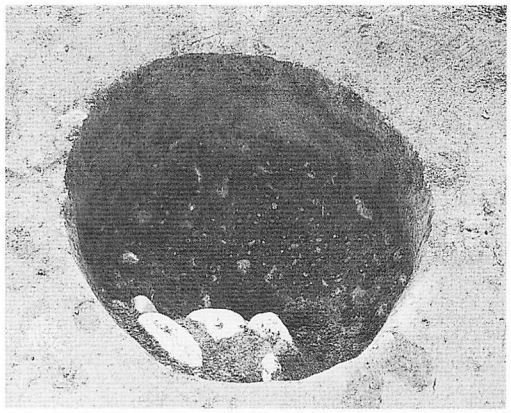
写真図版 7　RD825・826・827土坑



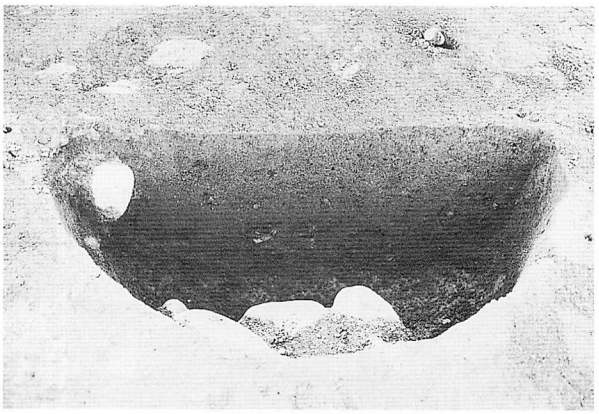
RD828完掘（南から）



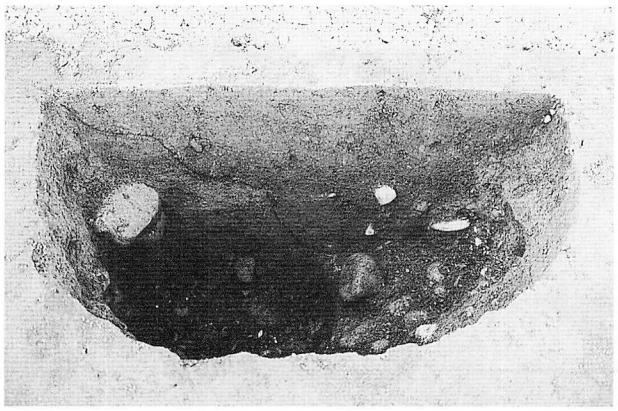
RD828北断面



RD829完掘（東から）

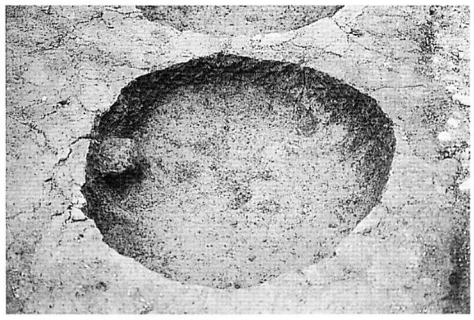


RD829西断面

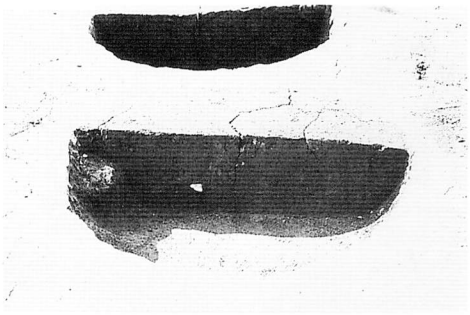


RD830完掘（南から）および北断面
（写真上側にコンクリートの基礎が存在するため）

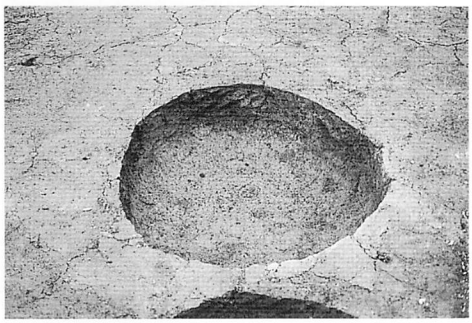
写真図版 8　RD828・829・830の土坑



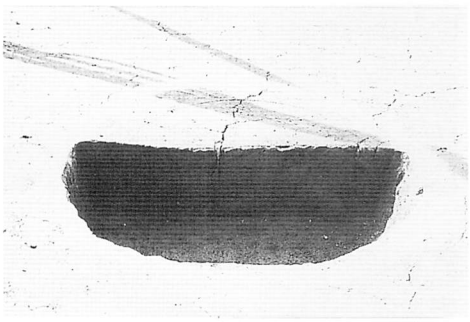
RD831完掘（東から）



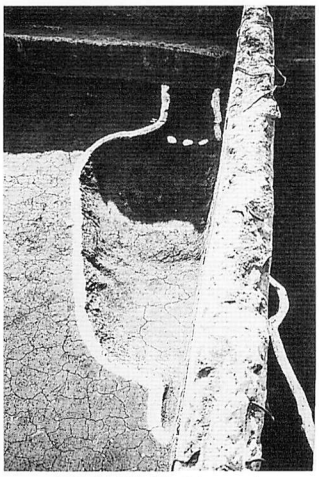
RD831西断面



「開元通宝」出土のRD832完掘（東から）

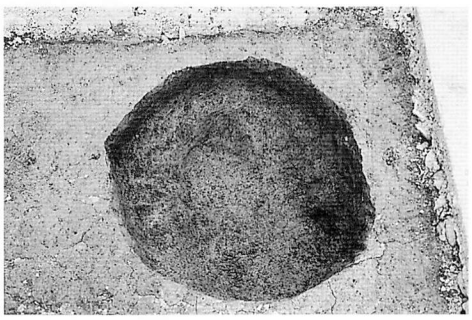


RD832西断面

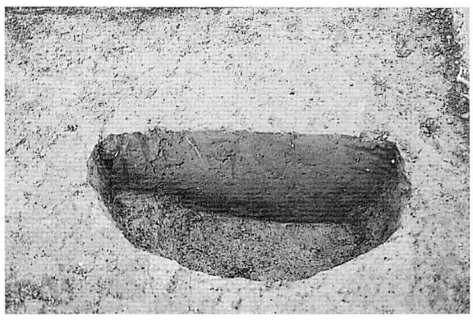


RD833完掘（東から）

RD833とRG279重複関係（南西から）
（RD833の方が新しい）



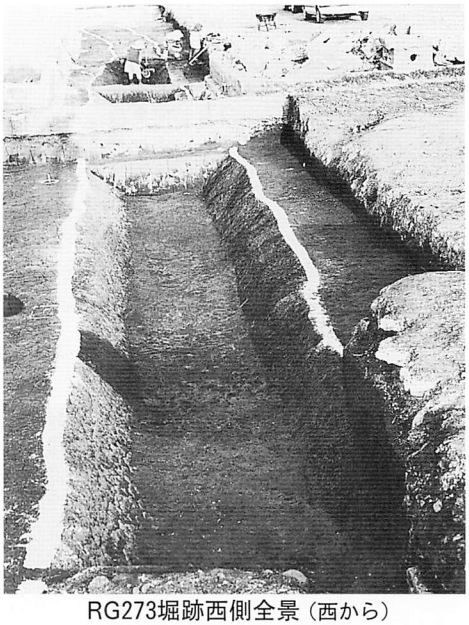
RD834完掘（南から）



RD834北断面

写真図版 9　RD831・832・833・834の土坑

RG273堀跡東側全景（東から）



RG273堀跡西側全景（西から）

RG273堀跡南側完掘（北から）

RG273堀跡西ベルト東断面（西から）

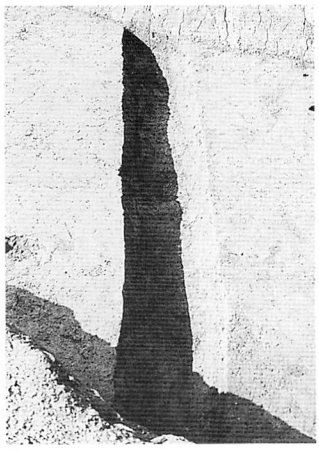
RG273堀跡中央ベルト西断面（東から）

RG273堀跡完掘（西から）

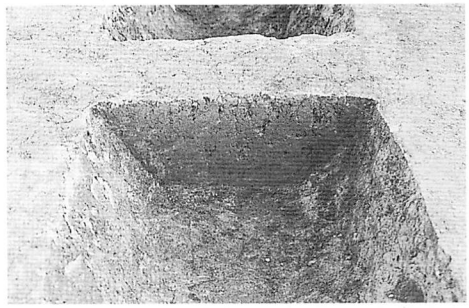
RG273堀跡東ベルト東断面（西から）

RG273堀跡精査風景

写真図版10　RG273堀跡

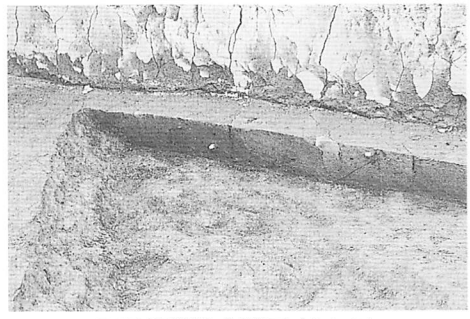


RG265溝跡完掘（南東から）
（23次調査区へ続く）

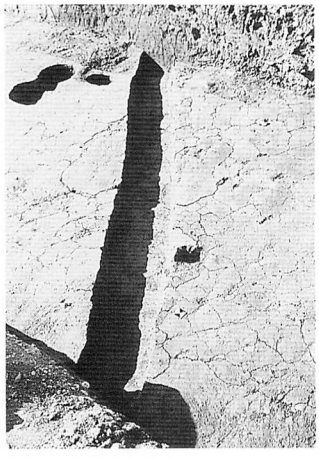


RG265溝跡南断面（北から）

RG267溝跡完掘（南東から）
（23次調査区へ続く）



RG267溝跡北断面（南から）



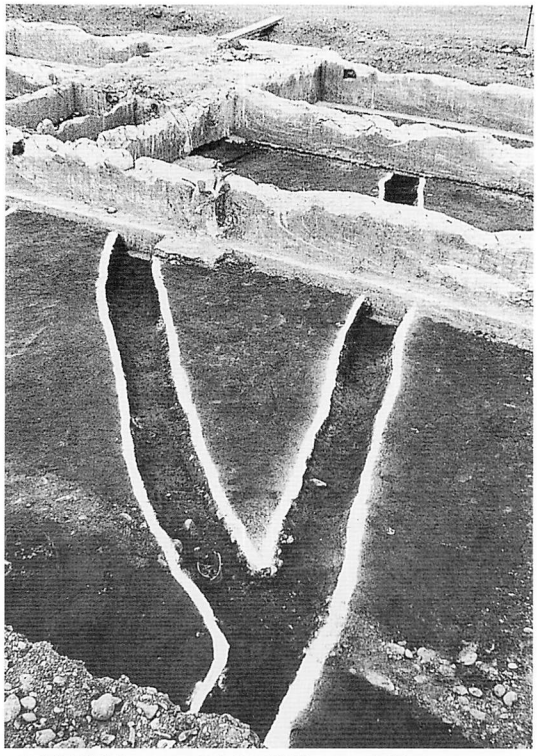
RG274溝跡完掘（南東から）

RG274溝跡南断面（北から）

RG275溝跡完掘（南東から）

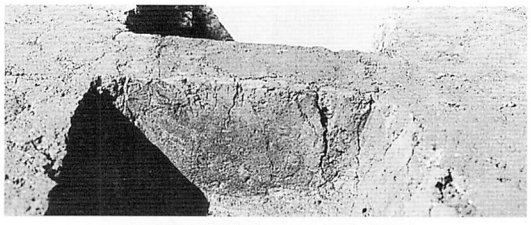
RG275溝跡北断面（南から）

写真図版11　RG265・267・274・275溝跡



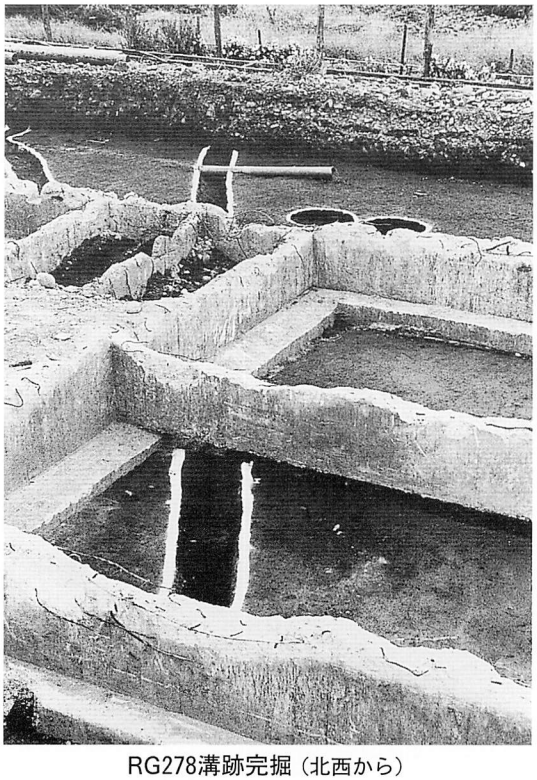
RG276溝跡（右）・RG277溝跡（左）完掘（南東から）

RG276溝跡北ベルト北断面（南から）



RG276溝跡南ベルト北断面

RG277溝跡北断面（南から）

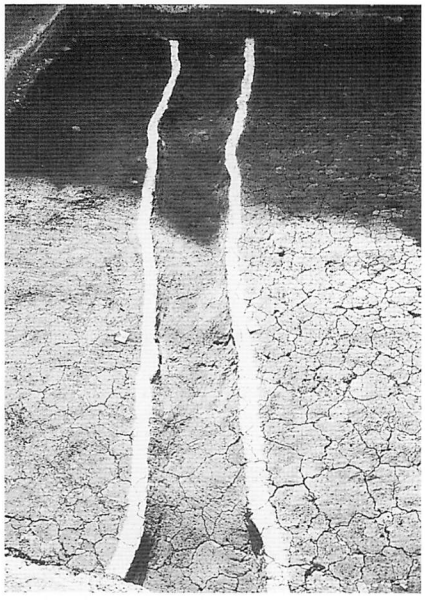


RG278溝跡完掘（北西から）

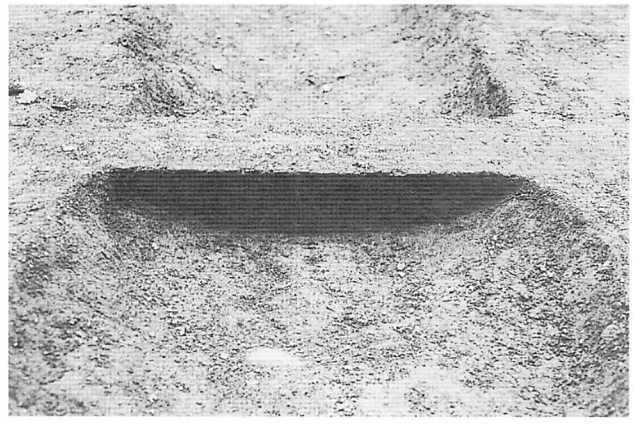
RG278溝跡南ベルト北断面（南から）

RG278溝跡北ベルト南断面（北から）

写真図版12　RG276・277・278溝跡

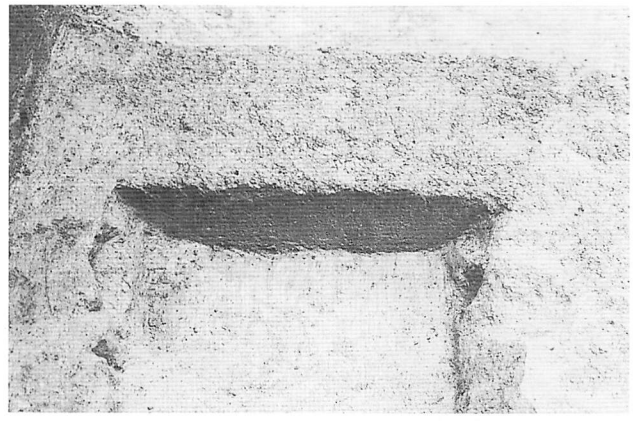


RG279溝跡西側
（東から）

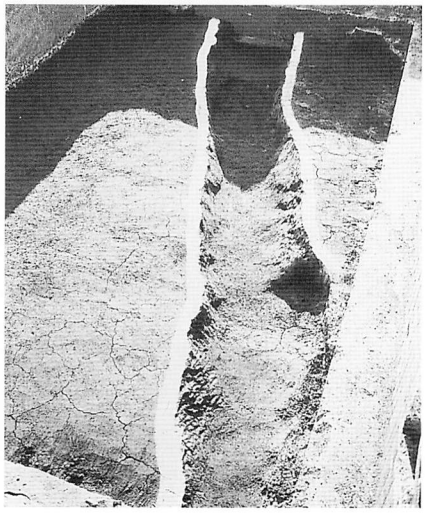


RG279溝跡西ベルト東断面（西から）

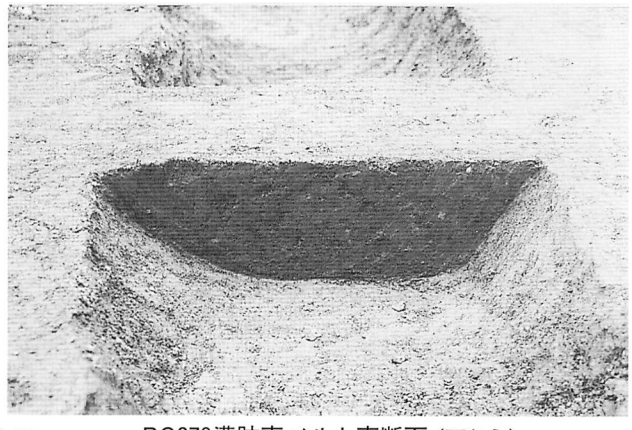
RD833に切られる
RG279溝跡中央
（東から）



RG279溝跡中央ベルト東断面（西から）

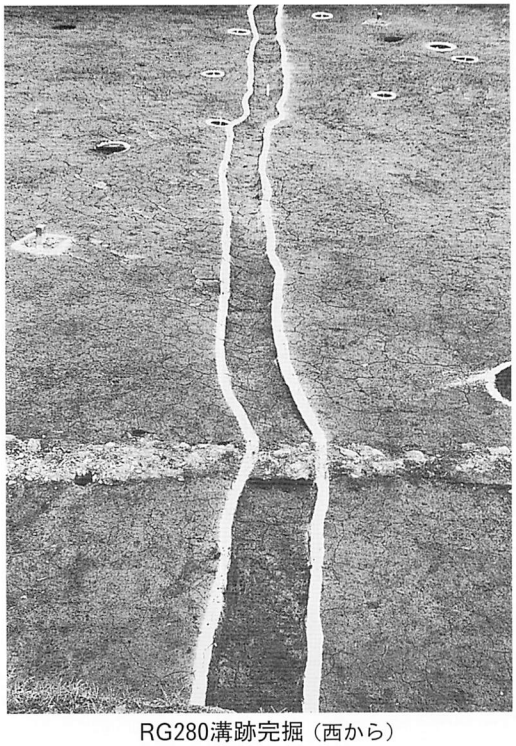


RG279溝跡東側
（東から）

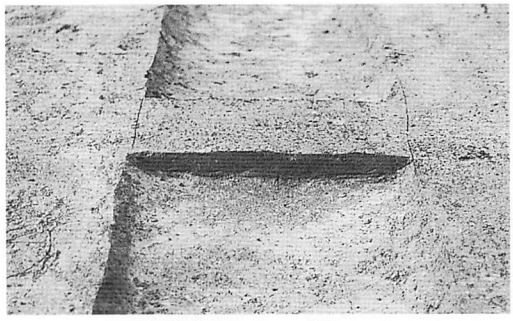


RG279溝跡東ベルト東断面（西から）

写真図版13　RG279溝跡

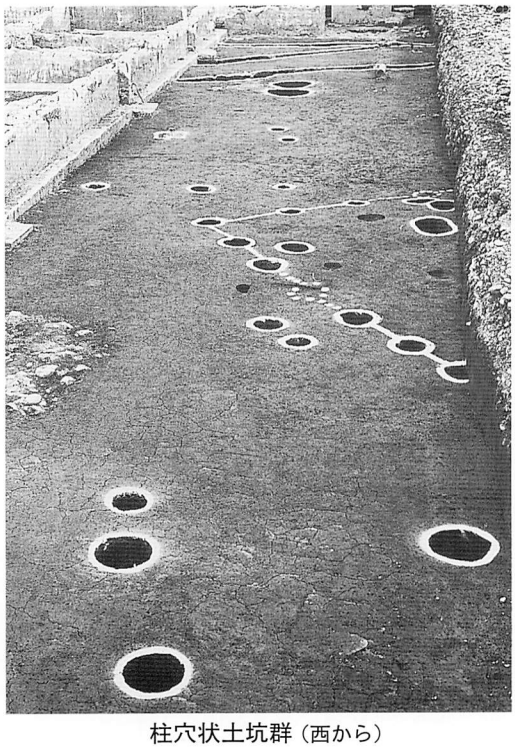


RG280溝跡完掘（西から）



RG280溝跡東ベルト西断面（東から）

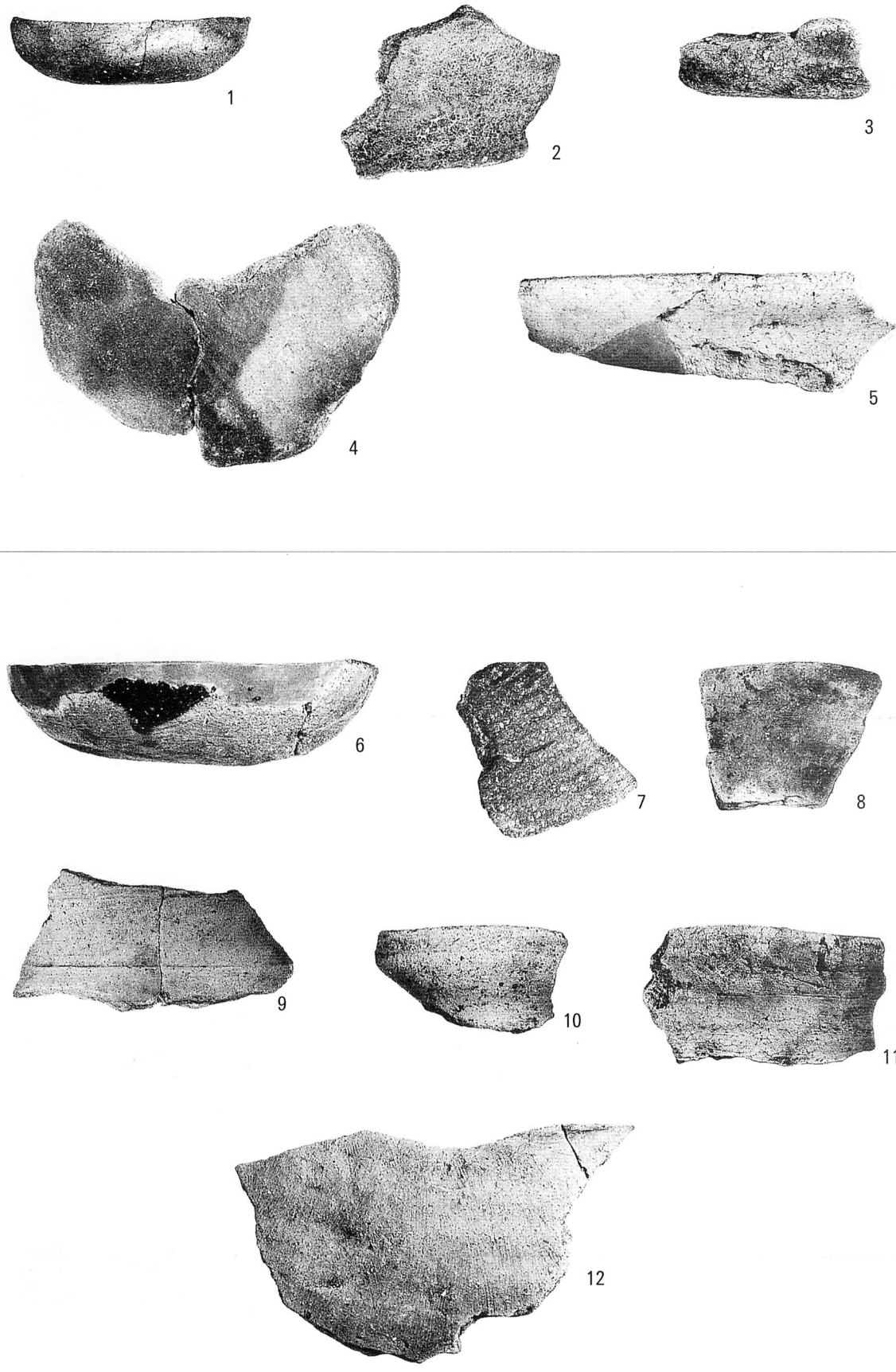
RG280溝跡西ベルト西断面（東から）



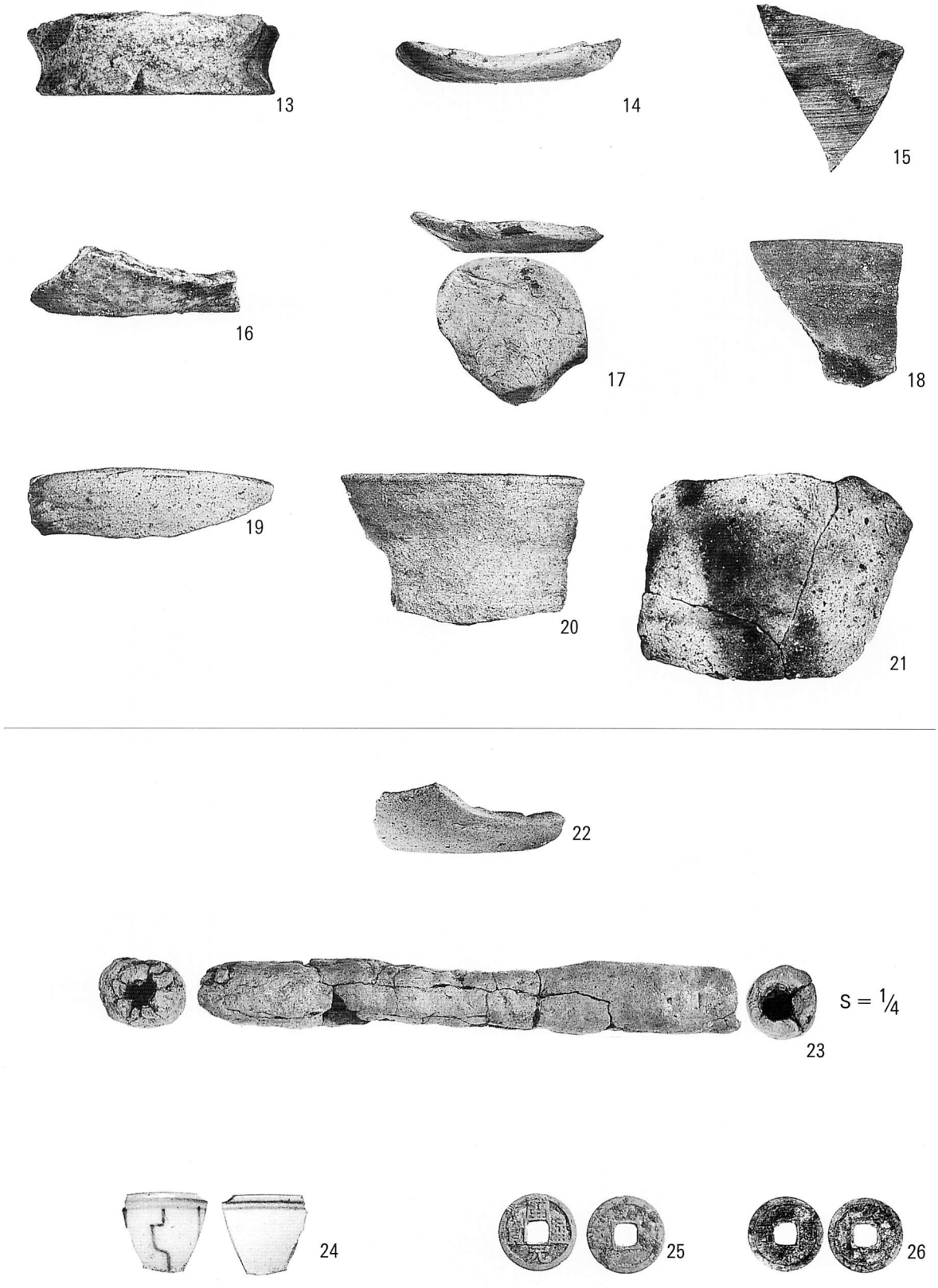
柱穴状土坑群（西から）

RG276・277・278溝跡・RD831・832土坑及び柱穴状土坑群（東から）

写真図版14　RG280溝跡・柱穴状土坑群



写真図版15　遺構内出土遺物（1）



写真図版16　遺構内出土遺物（2）・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だいたろういせきだいにじゅうにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	台太郎遺跡第22次発掘調査報告書
副書名	盛岡東警察署警察官待機宿舎建設事業関連発掘調査
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第365集
編著者名	菅原靖男・半澤武彦
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019－638－9001
発行年月日	2001年3月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
台太郎遺跡 第22次調査	岩手県盛岡市 向中野字向中野 39－1	03201	LE16－2269	39度 40分 45秒	141度 08分 44秒	1999.9.1～ 1999.11.2	2,500㎡	盛岡東警察署警察官待機宿舎建設関連事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
台太郎遺跡 (22次調査)	集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 中世 近世以降（時期不明）	土坑1基 竪穴住居跡1棟 土坑1基 堀1条 土坑2基 土坑6基 溝跡9条 柱穴状土坑62基	縄文土器 土師器（坏・甕） 羽口 土師器（坏・甕） 須恵器（甕） 開元通寶 寛永通寶 陶磁器	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職員】

所長	伊藤民也	副所長	櫻田次男

［管理課］

課長	川浪清徳	嘱託	千葉芳夫
課長補佐	山崎善光	〃	藤島恵子
主査	立花多加志	〃	新田トヨ
主事	日影睦夫	〃	佐々木光重

［調査第一課］

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	小山内透
文化財専門調査員	赤石登
〃	吉田充
〃	小原眞一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	東海林淳美
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	小野寺正之
〃	菅原靖男
〃	長村克稔
〃	溜浩二郎
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	村木敬
〃	北村忠昭
〃	丸山浩治
期限付専門職員	小林弘卓
〃	江藤敦
〃	藤原賢徳（6月退職）
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	北田博義（11月退職）

［調査第二課］

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
〃	金子佐知子
文化財専門調査員	中田迪
〃	工藤道孝
〃	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	千葉正彦
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	中村直美
〃	星雅之
期限付専門職員	鈴木聡（12月退職）
〃	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	島原弘征
〃	

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第365集

台太郎遺跡第22次発掘調査報告書

盛岡東警察署警察官待機宿舎建設事業関連発掘調査

印刷　平成13年3月7日
発行　平成13年3月12日

発行　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11-185
電話　(019)638-9001・9002
FAX　(019)638-8563
印刷　株式会社 五六堂印刷
〒020-0021　盛岡市中央通3-16-15
電話　(019)654-5610
FAX　(019)651-2167

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001